

寬放錄

七

昭和五年七月上浣起筆

特別
イ4
1919
424





寛政録七

○竹内式部と贈位の御沙汰のありけりぬ次廿  
 一年にあり。式部より子孫が無いのを徳大寺家  
 が御沙汰を拜して徳大寺の御故西の寺  
 家より式部の門人があつて式部と異つて幕  
 府の忌澤と瀬の比其より田の御沙汰の御  
 見せあり。おる式部の五族の御後々御後々  
 川あり、新居の人とあり、白山社ありと  
 式部の御念御も建つて居る澤地あり、贈  
 位の御沙汰書にありとあり、互々方が家を







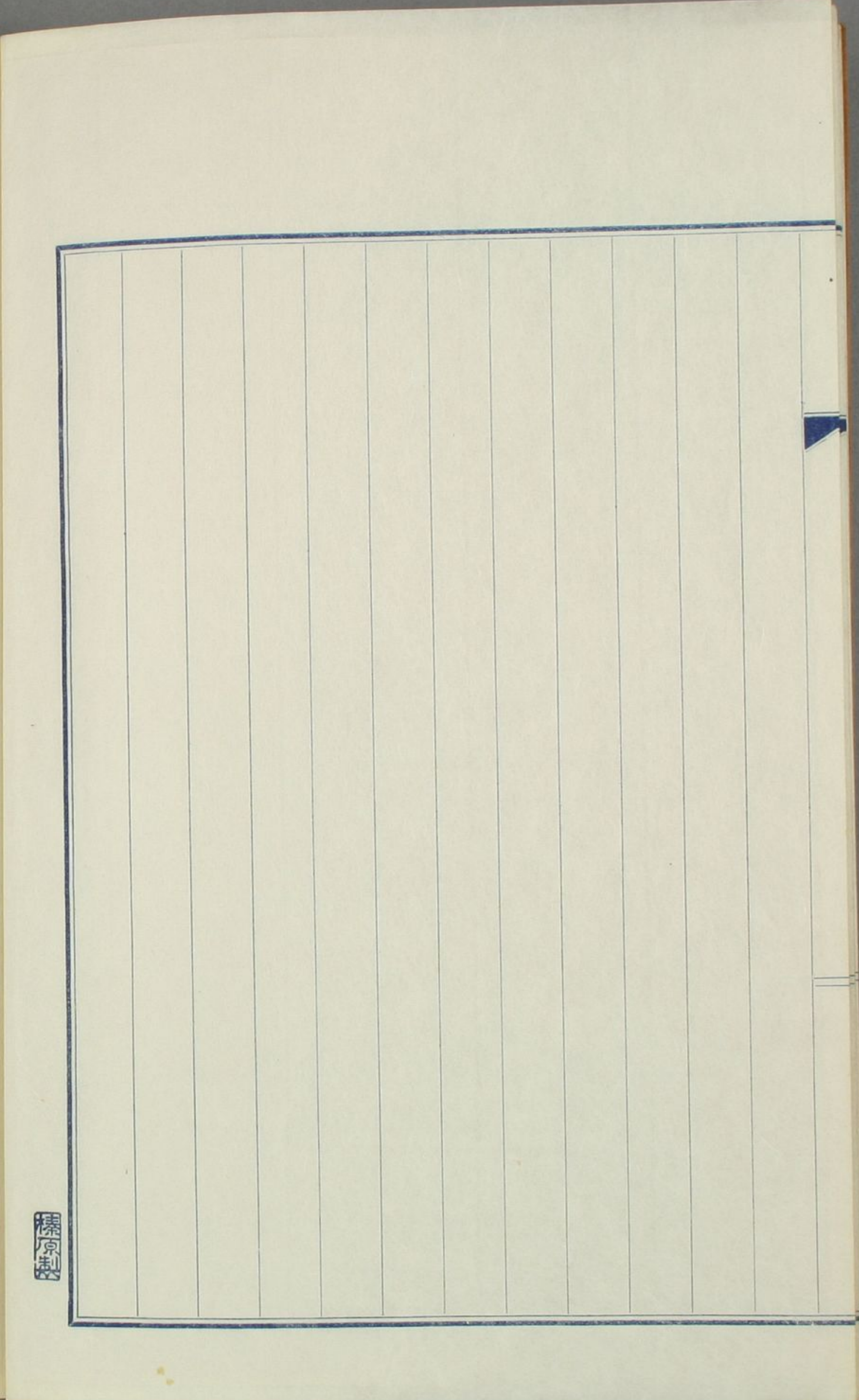
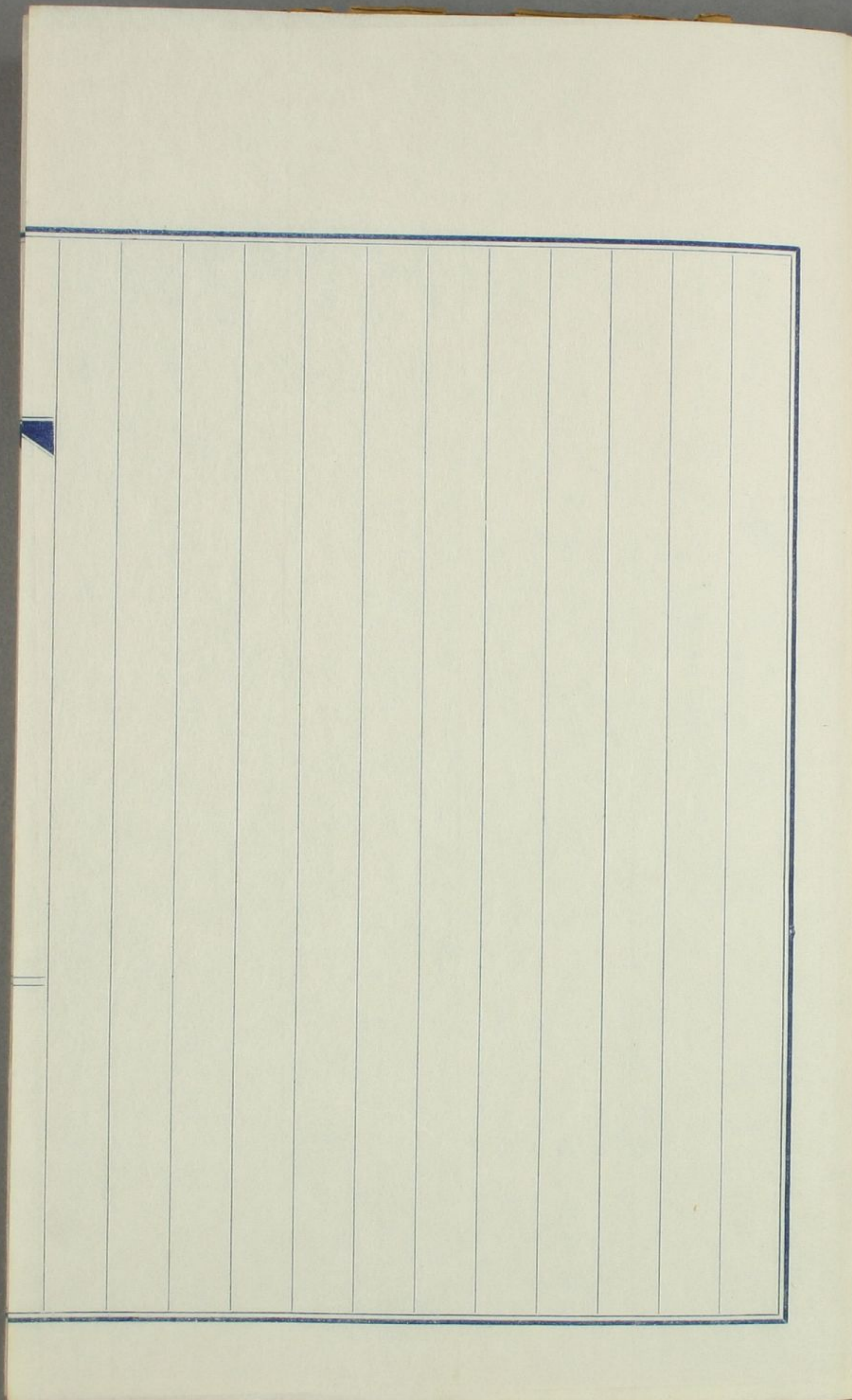






西村岳を附出の地形ハ右圖の如クハある。西村方ハ主  
室の事とする事。前後の日程ハ常川から、別に日程  
変更を要し、<sup>つ</sup>昨日の日程ハ由途海路再心  
和歌山に出ることとする。西村の役ハ室  
ろ鬼ヶ城附近長崎から乗船して三時を越  
汽車と連絡して日程ハ就方ハ便利である  
うと云ふのである。可成美と従ひたい。一行皆々が  
西村方へ主室のことが出来れば自分のみと  
室の場所をよめる。一泊も一せうと思ふ。







○子等、毎々茶人から思ひもあつる事近々  
感時を拂ハセしむるが、此頃の茶人が差圖して  
表装をさせれば茶のけの物おも或るさぬか見れ  
るも表装割裂は何ともさぬ滋味のあるよめ  
身は七雜つてゐるが、けづくし、味は豊く、さ  
大思然と折合つてゐる。こゝろ列装は昔し  
飾り而倒れさるる千々入つたよめ、さるこゝろ  
茶人の選擇はさうせんが應用せらるるうら  
うと茶人の趣味眼に感時し、此のさるめ  
又浦へて見ると、其の列装、表の華麗を態  
と没し去つて、殊々裏を用ひしことか、おん  
其意正に感し、此列装に依つてハ之れに似  
て

標

ことごとく案をたす

○人の遺言するもの多くの場合家庭に秘して  
世に知らぬ難いが、自らの知りもあつた或る老婦  
人の臨終に、家族に遺命を、若い時此家は  
嫁（北の陸の）振袖をえし、死体に着せて  
くんと云ふは、どんまを味かあつて、おん  
此が、推測して見れば、良人の早く死んだ地  
下（長）に、見くまへ、娘入姿かよふと思つたの  
が、あつた、支那の意地から考へると、  
個々の身注文が胸に透くのも、人柄上、寧ろ  
ら、南のよめさる、唯此婦人の多くの体（表  
意）は、臨終に、おん胸奥を吐かぬの



かまひが、家出をすまひにコンナとあむ天正海家の  
の味がある。

愛まひ多く家庭に秘してあるから、遺言の  
愛まひに及ぶもの少く多い。保し鬼のするとし  
及んぬものもある。ある人の話によ、振るるに  
遺言の仕方、いろいろ終る仕末のいろいろと  
書き事畢つた末に、妻に就て「お思お愛の  
関係があるから、こんな別と物を贈るに及  
ハぬと書いてあつた」と言ふが、遺言に「と」妻  
ののろけを云うてゐる所がある。

○各所を括弧を需むる所の、輪読、絹糸、堆を  
乃ち其執を忍んじ、終日揮毫、行を

漢字

葉はまの心の思を

漢割書物館の二編叙云々

歌昇 萬象

廿短長常多

大波行浪今何處の海鏡云々

伝言 詩好

神神 暢情

某年 國の春の事

壯思 雲飛

志の氣 移山

義是 正路由之何當歩

心在中 茶割重 衣襟 柱目 在也



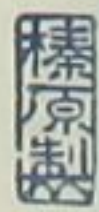
増築成りしと云ふ書に殊に巨額也

酒田書春  
川氣清古

を大書として二面の額を乞ふ

此書系の著る本神託余の家より建  
つ所、扁額を乞ふ二三枚増し置  
し之を乞へず更々乞ふべき也  
人と期す名司鈴木守雄余の幼  
時の学友也并著る廟壇書の一紙  
を乞ふ

可憐荒穢窮乏の骨肉有る  
天動地文



え本向の詩移して昔公の文徳を  
稱すべし

四五色紙を挿し毫す其一云々

耕竟田者有久  
志早百夏耕心田者無百夏  
志日りの皇年

〇余年少も屋瀬旭莊の詩と後（往々語通  
するものあり）常つて其集板楸詩鈔を花（今  
はつて見えぬ）を不便としたり、偶々坊間  
萬葉指の詩鈔と詩三冊一板と為す、指の書  
名と使ふ、中の一紙旭莊の朱書を存す







君居左海濱我住右桑市相距雖不遠相  
逢一回已忽蒙示佳扁朝閱又又視奇  
想數登天心正聲破俚耳愛之家留之忍  
以三年矣聞君怒我慢彼人故為爾須  
美原未累痛工別字也我亦誠可誅我心  
非無以西施影雖妍人不以為美平澤之所  
存他本何得此生來止一逢後會安可俟放  
此君身歟留此君心爾待我粗能語眾  
此亦一理趙璧幸無玷請轉怒為喜

余公去少句四五七極好

一 看元人間不平多好風景家似俗多

一 舟中即景  
一 得異書時  
一 晚集何物  
一 掃柳在後  
一 寺僧草枯  
一 雷因與而  
一 崖崩樹折  
一 降改人  
一 寒風抽古  
一 際一雙  
一 江柳自  
一 莫少如



長澤君の詩集  
「百梅花詩」所感

市島春城氏談

若くして見ると北地を郷土とする漢詩人の詩も亦雄たしい、大久保淵、阪田五峰、小崎聖川、佐藤六石、歌へ来ればみな地に地下に去つて今では其二三を挙げ得るに過ぎぬ、さうした詩人達の歌にあつて北地を郷土の長澤君が舊によつて詩壇に活躍してゐることは以て大いに自分等を心強くさせるに足る。

過般自分に感服された同様の詩集百梅花詩に就ては本紙に其詳細の紹介的批評も出たと聞いてゐるから今更其詩品や詩壇に關して言及する重復を避けるが、自分は今來隨書に就て、殊の興味をもつものであるから其地から毛と

全體自作の集を公刊することの是非については古來大抵議論もあつては終身詩を成せざるにありとさへ極言した大家もある。しかしそれは餘りに徹然に言じた言葉で自己の詩を知るもの自己以外にないと同時に其詩に思實なる感に於ても誰よりも其作者であらねばならぬ。すでに自作に思實であるから之を世に問ふが法や形に細心なる用意を以てすることもまた自己の結果であるから自分はこの詩壇の権限として目を凝らすことに決して反感をたうとは思はぬ。否それだけ自己の詩を熱愛する松雨君其人の面情を羨ぶものや、曾六如の詩にも「得詩莫他視。吹簫感招盤。天下求知己。莫如己自知」といふのがある。この自傲あり始めて其作を世に公にするにともいふるし、又其詩壇を始めて美化する地出もある。

今一つこの書に多とせねばならぬことは無時或す二十四大家の詩を附してあるが、それらの人々は大行強してゐるが、野村、大正季の漢詩壇に感銘ありし傑出であるからこの書によつて過去に於ける斯界の權威を再び地下から迎へ来た感があり、一種の詩壇色録とも見ることが出来る。

松雨君の詩壇が著しく進んで熟練の域に達したことは、久しい以前に時々その作をいたことのある自分にとつて驚ろ一つの異である。権化の百姿百態を縦横に詩止してあるひは華、あるひは清婉、實に才藻の豊富なきが窺はれる。自分は一言爽然として花香の骨に徹するを賞えた。聊か茲に較量する前目の一瞥を語つて連れ馳せの紹介と著者への感佩とを本紙をして發表して置く。

七月二十日

○もうれ筆下研ひも青しと君を踏く  
 印が未だ。毎年今頃と隨筆下をわのす  
 ンとしてみよか、こころをまじり其氣も  
 い。日々ちりて居る随筆下から送りに出  
 高の枚数もあつたか、行か眼目とさ  
 長の布が其んが質弱の感があらう、こ  
 隨筆下早稲田と心もそのへき去の命とちりて











かた其の雨量は人間のマスターと云ゆる程度は思  
きず、時々大洪水ありし最も高を飢へ未のふい  
あつた、治め其の任費を惜まざるに即ち事奉の  
年の早々の雨期に堤防決潰を保護すことき  
ハ必竟修理徹底せよ、昔々官廳出みの  
各川に修築を振りまき、一時を糊塗すも思  
うが故の女、萬全を祈するの覚悟をくして資を  
こんま注ぐ、一水到んばんと共に皆空しく天下豈  
之れを不任偏の流ぬ策あるや、水難の相續  
ハ其の罪又あつた、治め其の罪也、若し一川を五年  
十年分割的に出すの資を一時に出して徹底  
に堤防を修理せよ、豈にのみ災を禦すことあ

標原

らんや、為南利を空の伴ふこと常にある、害は除く  
べし、利の収めざる可も、吾邦人勤てせん、水難を祈  
ふ。而して旬日雨あり、二旬あり、三旬あり、こ  
早大に際しては彼等、香檳笑して雨を祈る、  
あつたや、日本の田制は、田を、是れと風  
土の然るに、所、多きけん、木、穀枯死す、  
水、田の生命なり、是れ、排せ、術、さる、あ  
ず、あつた、地裂く之れと、あつた、日本  
ハ、他邦の如く、梅雨あり、二、百十日の厄あり、  
梅雨の人、跡、雪、ふり、汗、の如く、千、雨、の、  
ハ、咳、嗽、の、如く、**果て日本は、** **国有者**  
ハ、利、七、ある、言、あり、日本、の、**国有者**、の、よ、と、せん、ハ、



辟人をまよふ能く、害を除くつとの利のぬき  
のがある可なり、要するもの言がまの譯むら  
あやし物の比較が判すべき也。試を絶對する無  
い邦土を考へて見よ、水の不自由なる所を考へて  
見よ、一年或人と雨の降らざる水がある、稀んと雨ふ  
る所がある。砂漠と云ふ處を醫する溜りぬす  
るく行旅の皆困るあり、沙漠とある所は飲  
料のありきなく、降雨の時々タンリに水を採り  
て俵かき飲料に供する所かいくともある、或る  
所はまん水、何れも貴重なるものである、斯る家  
に如るんを物を採らぬる為めは水を仕用するこ  
とが出来ようか、雨無きに植物も少くはす

標記

ゆき、粉木が其のゆき、家の石柱を以て築く  
外は無しの物は四の現実であるか、或る所は  
丸一天道地が山のありては境嶺が一物もなき  
人目を眩かし、或る所は井水、烟氣もなきの東も  
七五の、或る氣候と油をすする大なる後利が  
あるの、或るを缺くし、日本と較べると  
生活する人があつた昔痛むあり、天の配が  
是に注ぎ、人間のおのづから攪るものあり、  
斯る偏りなき氣候は、或る天恵と云ふこと、  
む難い、日本の四土に較べると、實に天恵と云ふ  
らざる相違がある。思ふところ、或る人の昔、  
天恵と云ふ、深く感謝せぬべし。



# 動物富士登山競争第二日

## 山羊さん大飛躍

### 遂に頂上に達す

#### 豚さん悠々八合目へ



夕御の通り廿日山の石室に泊つた山羊、豚の両選手は廿一日早朝それ、元氣で進んだが山羊は一日の休養に益然として飛躍、四合目より卅三廿五階を八時五分で午後一時卅五分遂に頂上に達した、一時平均四丁強の行程であつたカットは須走口に降りた驢馬(一行)

手選島飛てに上頂

「山羊のひげ、八丁と改めすべきたと決断し西村博士を中心に一行は甚だな吹雪式をあげて進を急いだ、山羊は峻険をもともせず進む、頂上からワツと萬雷のやうな威嚇、頭張れの

「山羊のひげ、八丁と改めすべきたと決断し西村博士を中心に一行は甚だな吹雪式をあげて進を急いだ、山羊は峻険をもともせず進む、頂上からワツと萬雷のやうな威嚇、頭張れの

「山羊のひげ、八丁と改めすべきたと決断し西村博士を中心に一行は甚だな吹雪式をあげて進を急いだ、山羊は峻険をもともせず進む、頂上からワツと萬雷のやうな威嚇、頭張れの

# 動物富士登山競争を終へて1

## 話題の主人公

### 驢馬

お供選手 結城慎太郎



山頂をきかめた驢馬多摩君、廿日早朝途中で二緒になつた浦田の藤田、春路の兩選手と意氣昂然と下山、村はづれ牛車も先で小学校の生徒さんに迎へられ須走村に向つた、多摩君も驢馬昇のために

て彼の祖先や親類と同じやうに山に強かつた、途中で道ばたの青い草など本當の道草を食つた時など同行の馬方が「草を食ふやうでは大丈夫だ、山に馴れ馬には起らないものだ」と感心してゐた、お茶屋で休むたびにサイダーと卵を無理矢理に飲まされてゐたがこれも随分利いたらしい、驢馬がサイダーを飲むところを見ると

## 四動物の登山記録

頂上著順	出発時間	頂上到着時間	所要時間	距離	平均時速
1. 驢馬	(何れも廿日) 須走 午前六時半	廿日午後 三時十五分	八時間四十分	三里十七町	約 十四・五町
2. 牛	御殿場口馬返 午前七時五分	廿日午後 四時五分	八時間十分	二里廿三町	約 十一・八町
3. 山羊	大宮 午前六時半	廿一日午後 一時十五分	十八時間十九分	三里十二町	約 六七町
4. 豚	吉田口馬返し 午前三時	廿二日午前 九時十五分	廿九時間五十分	二里十一町	約 二・六町

「山羊のひげ、八丁と改めすべきたと決断し西村博士を中心に一行は甚だな吹雪式をあげて進を急いだ、山羊は峻険をもともせず進む、頂上からワツと萬雷のやうな威嚇、頭張れの

配産員募集案細本人來談  
野下沼袋八〇四東京日日出張所  
繪の好な十四十八歳迄の本人入  
談本所林町二の二九高田版畫所  
募集乳飲料販賣員急募日收五

女子を求む麻雀出来る方尚よし  
飯田町三の廿四 九段麻雀クラブ  
うば女の御紹介 電話三八六  
神田サエギ町電停下入服店裏

妊婦 預費費〇御困りの方は無料  
尾張町二番寄見電四谷二七〇  
男女児童後男七十日女百日事情  
小石川竹早町卅五鈴蘭園園方迄

た藤君の遺言を山頂の一角に  
ばかり一生懸命に登る、その一生  
八千五百神田三崎町三の十三内田

貸下 宿大森新築後三年庭廣  
し十四貸五〇敷六道員少  
願念議本郡須賀町卅五鈴蘭園園方迄

金



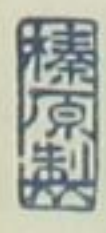




○以之梅墩鈔を讀み苦熱を忘るるを集中  
夏時の詩を承るるに或許ありし、且つ夏景  
を描す概め淡霄、他景を描すの功に似たり夏  
を詩とすること難かる。

、泉衝巖角雪花揚、一洗人間苦熱忘、露不起  
塵若多輝色、聞將解碎芟荷香、蠅收凍脚  
逃陰地、蟬曳寒聲、悉夕陽、靜坐思詩思  
且睡、醒來、腹行、半荒、

、残暑如去人已去、恐復來、清風似君子、已  
未恐復回  
、蚊如真小人、偶如偽君子、去偽若異形  
均若日版死



、熱去於疑、少蚊、蠅、蟻、恰若遠途人  
、蒼繩聲似雷、僕馬眠倚樵  
、驛差與肥馬、村僻有豪狗、渴時難進  
、步、熱跡不宜酒、歎卜前於林、中有陰  
、象名、

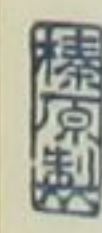
、惟時六月炎威強、筑江百里水如湯、波  
、翻倒照映人面、千頃晃耀不可南、南即  
、愁心、斯月好何許、輕羽異怯、風難自潤、  
、終日不食、清似水、一聲可放大於山  
、伶俜瘦菌抽寒竈、綽約嬌芽起臥薪、  
、蝸進牆端、途已盡、魚浴池外、勢初伸、  
、百升流汗、盡心胸、倦物殘書、睡味澆、難得

大政  
之



永宮箱盛夏、聊博瓜鐸送丁冬、雷因  
且兩成空想、雪亦如人有懶容

旭在の詩概ぬ跌宕杜甫に似たる所あり漢味  
を寓し平校に墜ず、陰雅の類を踏んで巧み  
な音語を弄す、長篇に列して往々數百句に亘  
るものあり、而して編者をして傳ませしむる  
ハ其の蘊蓄高と大氣とを兄さへし、吾輩前二  
四五の句を摘す、今六の句を摘す、曰く寒蟬  
露枯葉、孤鷺立、瘠船、定して二天の畫  
と見さし、其の山行の詩、曰く踏嗅石角  
尖、猿挂、落蔓、弱、又曰く欲懸崖、已山崩、於  
落、藤、猶抱、こゝ登攀の客の危崖、臨んで帝



三感す所而之れを括す、吾の難し、曰く春花  
紅似暹、秋樹如似乾、こゝの定景、こ唯此乾の  
一字旭在の神筆、曰く喜人開口笑、笑外  
有餘、秋、悲人開口笑、天中有餘、酸、平淡の  
内に至理を寓す、曰く鉅月未沈、危岩去、微  
風似為柳、情吹、月、露、霧、風、柳、皆平凡の語  
而して彼人の鍊字、入ん、斯の如きの自句を考す  
兼り、其の神筆、曰く、春看柳、秀不着、松、敢て  
新、去て見えん、名、名、也、而して聰心多、芳、其  
百餘、蝶、一、花の句、解、古、也、劍、掃、を、淡、正の思ひ、あ  
り、云く、遊、鳥、從、來、如、遊、仇、畫、滿、不、出、釀、詞、結、心



七亦敬之句字を其の如く云く多年古竈人物以未夜  
空廊鬼氣寒社詩を讀む如し又云廟廊已腐  
推無勢古佛吹氣徹惟温此句亦前二句と共之曰  
賞ちり又是又云墜葉皆倒光陰風生其内捲  
舟并醒雲開口含冷露此九游龍洞に入るの詩  
人をして栗然とせしむ云く開不遇人花は命盡  
能容物材居心深山を叙する此句無のとも  
○云く月輪旬旬當之碎日脚端跼蹙之歎  
此九游香柑歌の句巨材を叙する此句無の  
○此句柑と共之蒼古云く瘡瓶醜腐人の暗室  
此蚊又云く朽凡抽出幽闇數帷墮曜又云亦古  
詞寺を叙する語其意多るもの此句に入る云と難し

和歌

云村垣袖紅翻棘鞆滋の體里寒山此命是の  
此里詩人の後

○宇都宮に在る親族医子坊士直冷典二病  
後と新薬して成る余に囑するは洋薬に拘  
くる顔面の瘡一毫をとも偶々旭在の詩  
と讀み二句を切らすとを得る即ち者して  
此の云く疫神病鬼莫能果其毒沙春属  
来空屋四空

七月廿三日

○余が庭風極あり何人の叱り所を知らず羞し  
る数十年前前縁を係り池の寐ひ朽れ先い巨  
巖巖巖洞をうし山あり塙あり溪あり沙灘あり  
巖巖巖巖初めて来りて客見て敬る











人

七月廿四日記

舟乘池と稱揚池と云ふ事凡そとく可寧ろ形に  
従つて新洲と号せん歟。吾郷里に新洲の海地  
あり、多えに因りて或可らん吟橋迎月橋と  
改む（目）か

一新洲ニ杉嶋 五葉河四萩沙

五嶋橋 高濠洞七原恩山山通仙徑

九條長燈十閑杉庵土銀沙灘

土望望塚 土小粉塵土垂地紫園

五祖集つ土田平嶋

○梅墩詩妙凡擣餅の詩多、山般の事、頌

梅墩

こ字し難し、字定むのとあふ終に、擣餅に隨  
す、旭在の詩能く字し、且つ体を得、表が  
べし

### 擣糕曲

南隣北里杵杵起、冬々磔々不暫已、全  
上有甌中有湯、蒸氣如雲掩未揚、乱  
杵撞的々、行列衣、米共杵根相粘、续以水  
濕杵、拳始輕、的底唯餘一塊雪、乾梁成  
粉、堆大盤、杵梢懸糕、投尚温、手塗梁  
粉、擣糕面、圓々之、月雪中翻、一印已  
又一印、富家春多、杵杵多、如笑如歌、聽  
難、如一、如日太平、豈勞康衢、親謡



俗、此亦當年鼓腹曲。

古人極を称すも少く、而も七尤在の如く、稱揚  
微塵すもよあらず、左に之んを抄す

嫣然一顧乃傾城、落暈摩多入冉々、輕李杜  
韓蘇、空言識面梨、柳杏、依、此先  
元後春無色、何家吹未、風有情、寄、終、啼  
驚須自惜、垂楊樹、抄、莫、芳、都、

余、初、の、梅、傲、詩、鈔、の、枕、藉、一、句、句、既、一、掃、除、す、る、も、の  
少、か、く、す、高、四、五、段、を、心、き、く、の、あ、る、云、樹、種、無、花  
樹、村、寺、有、寺、村、余、此、句、を、受、て、花、樹、寺、と、い、ふ、ま  
す、寺、の、村、と、改、め、ら、る、云、柳、權、不、謀、又、何、事、依  
然、開、淡、の、の、裏、に、表、を、穿、つ、る、深、し、云、途、林、已



暝、鴉、翎、急、衆、州、將、枯、蝶、騰、寒、心、を、弄、す、何  
人、の、巧、み、も、云、樓、氷、坊、馬、吻、回、雪、及、牛、腰、寒、中  
荒、驛、と、行、く、の、あ、る、云、心、を、解、(難)  
云、如、楊、抱、愁、天、色、昏、空、空、訪、病、而、却、来、  
病、客、羈、旅、蕭、條、の、情、穿、ち、得、し、よ、云、洗、未  
京、根、任、望、耳、飽、聽、如、春、滿、漣、都、句、敢  
乙、音、を、さ、す、唯、何、人、の、心、を、  
の、境、地、  
一、掃、除、す、る、云、人、近、唇、梅、攀  
忽、久、舟、徑、魚、背、龍、初、驚、空、早、う、音、の、思、こ、か、如  
(而、か、七、斯、の、勁、海、あ、る、す、ん、荒、派、の、海、里、系、を  
描、す、能、り、す、云、江、楓、埋、冷、月、風、柳、露、疎、星  
甚、直、字、眼、の、裡、と、爪、と、い、は、り、云、嫩、柳、陰、疎、管







飛、釋文、多く難字を解する、備して文意  
の大体を説く、疎き、随つて教員の生徒の  
晦みや、講説者と、朦朧なり、生徒の漢文  
科を厭ふ、謂ふるべきあり、あつた、教員、  
去る通せし、如、何んか、講説の流暢と聖ある  
けん、生徒の漢文科を忌む、講説を、  
も、反離、減、列、衣、交、から、嘆、云、語、重、の、如、く、解、し、  
難、難、據、の、曰、く、世、未、聖、賦、曰、く、帰、去、未、賦、を  
の、人、口、勝、突、し、る、文、の、故、を、以、つ、て、多、く、教、科  
書、に、収、め、し、る、也、此、等、の、賦、言、外、に、去、未、あり、之、の  
を、今、の、教、師、に、教、わ、る、既、に、難、し、其、の、教、師  
を、し、て、生、徒、に、教、へ、り、も、あ、る、抑、も、無、理、也、而、さ、る

漢文科

漢文科、高等學校入りの試験を標的として  
其々の文を収めると例とす、試験の法を  
改めたる限り、教科書の編成も亦改むる  
能はず、漢文の力の益々低く、し、て、教科書  
の、文、難、き、を、避、け、り、け、易、き、に、就、く、能、ん、が、酒  
今日の如くん、漢文の教育の真に子弟を毒  
するものと云へる可し  
○日本の家庭に久しく重んぜられ、養育の  
男子に耕し、婦に織をさせ、分業の自然に考へ  
るべき事、い、は、後、の、先、に、ち、養、育、が、女、子、の  
務であつた、後、と、階、級、の、区、別、を、こ、ん、が、行、は、れ、  
皇后の尊い身分を以てして、辛、先、自、養、育、を



躬として範を不し。胡解の宮庭の内より現る。養  
後世の室を存しとぬるのを見し。家庭に於ける母女子  
の業務としてこれるを適南である。よる無い。その  
業務の趣味がある。其の結果は女子に絹の衣  
裳を穿てる。唇紅が漸次発育する状を見らる。  
也興がある。蘭を心ののを見るも亦一段の興を  
借す。美を煮火で干つかも糸を引き出すの  
に更らるおもしろく、終に機の上はを及物を  
後出すと益んびの味絶頂に達する。女子の心  
こもる所の性を解の修をのわく。その行  
儀の法を知る。女子の頭脳を開拓する一教育  
である。妙齡の女子深き在つて夏の長日

の興聊を遣ふとす。こん程よのよの興の養後  
の発育も定まりに経路がある。宛から小兒を  
育てること。細心の注意を拂ふ。ゆるゆると  
くの努力を要する。朝早く起き夜におそく  
寐ぬい。あつと。深夜起きる換する  
の必要もある。女子勤勉の慣習は自然こんよ  
り生る。何れもあつと。美を存すおのつか  
ら巧拙がある。生育を助け早く上竹簇せしめ  
て凱歌を奏するもあつと。仕損じて所謂のノ  
タリ子とす。功を一筆に缺くものもある。自然に  
競争が起つて或は階家と競ひ或は親族と  
競ひ或は一家の内娘と母と競ひ姉妹互ひ







最も意味の深長なるものがある。養蚕を一の事業  
としてお南大規模に言ふことはいよいよ養蚕の  
がも自分の説く所である。家庭の養蚕も性  
規模が狭かり事業の目録に多量の養蚕  
蚕の失敗は抵おんも生ずる。人間の性  
食うる直つて夏蚕を以て送りしをす  
一春幼虫秋幼虫之んを登る家の女子の手  
を離れ杜丁の手を垂るは人の結果は却  
つて養蚕の女子が却て好果を得る  
為竟然が主とするからである。何るも無心か  
却て僕心を生ずる養蚕は格も亦其の成る  
を以て自分の荒らぐ一頃、位秋の暮の養

養蚕

既知の如く、養蚕師が必に世に用ひることかあ  
つて、先を師として迎へ、このことが豪家の一時習  
である。各家も家族連三四人の養蚕師を以  
て、半算計りする公せしものにもあるが、と  
んが為め、とんが益を得るも、自んか知らな  
い、斯くするものが偶々、些利本位とする。端緒  
を以て仕掛しをすすオ一階にあらぬか、思ひ  
る。今思ひ起すの、自分の成る養蚕紙(種紙)  
を作る、先を外國の養蚕とんか、このかある  
自んか、市時東京の遊學中かあつたが、百枚  
計りの養蚕紙を賣りして横濱の某商店  
を訪ぬれ、このことを思ひ起す、その統末は、



そのほか、記憶の無いか、多分、ペケを喰つて草臥  
儲けをしねえ男、さういふにやうな思ふ。妻の實家  
の必のて、大規模の物、此二坊、ま、開く、  
わつたか、結構大なる換言を、生じて、場所、  
を、必つた。要するに家庭的に、先ん、結果の、  
か、この、が、事業と、さうして、却つて、失敗を、  
を、等、の、養、務、所、を、事、業、と、さうして、其、の、得、失、を、  
さ、ふ、の、い、ま、も、家庭の、業、務、と、して、其、の、得、失、を、  
家庭の、年、中、行、事、と、して、此、の、慣、習、を、ま、ま、よ、  
し、の、い、ま、も、今、の、漸、やく、飛、つ、て、家庭、に、  
さ、う、さ、う、さ、う、い、ふ、こと、を、概、歎、する、こと、も、ある、(七  
月廿六日記)



○近年、三股、山岳、登山、者、の、高、層、の、ビル、デ、ン、グ、を、建、てる、  
や、う、さ、う、う、て、から、六、七、階、か、ら、身、を、投、下、す、よ、う、な、お、お、  
し、と、ある、悲、境、さ、う、い、ふ、い、ま、も、が、高、所、か、ら、死、を、目、的、  
として、墜、落、す、る、の、い、ま、も、と、さ、う、い、ふ、い、ま、も、死、の、い、ま、も、  
屋、上、登、攀、の、四、字、が、性、目、に、觸、る、誰、ん、か、あ、つ、た、  
か、コン、チ、標、題、の、書、物、を、著、し、お、お、の、廣、く、  
見、れ、こ、と、が、ある、保、し、ね、お、お、の、い、ま、も、  
か、山、岳、登、攀、者、の、説、く、所、を、ま、ま、初、め、屋、上、登、  
攀、か、山、岳、登、攀、の、甚、に、因、縁、の、い、ま、も、  
こ、と、を、知、つ、た、屋、上、登、攀、の、墜、落、者、の、逆、を、や、  
こ、と、の、い、ま、も、日、本、の、八、七、八、階、以、上、の、屋、上、に、無、い、か、  
外、國、も、五、十、階、以、上、の、高、塔、が、い、く、と、







七八に雑法に屋上登攀等のことが書かれ、これを禁  
禁改々んルと云くから斯くすの宣傳に有言と  
又んておる相違する。牛津の學生例は若行  
するに特々特に禁するの法を極めて屋上登  
攀の事が書かれ、是れ禁止せんと云ふと云  
ふか、是れは剣橋のようも批答的なるの外に不問  
に附せんとおるの事もあるか、兎も申法律が如  
何に書かざる屋上の階上登攀者を禁ずることか出  
来ると云ふやうな、深地人定まうて後るの法  
又のことの制やうも無く。兎も是れは盜賊も  
誤認せしめざる事と、而も其人の志を云ふ  
在るの事ありからある事とある。道々日本の

禁

クライマールに移り来るこのことか、尖端を行  
く事と云ふことか、切の例がある。七月廿六日  
一の●の●を●の●

○松平破天荒前、同人間が暑氣場を以つてせよとて  
あふが到秋数年、前日先の或る地、別荘を設  
けて毎年そのへ出のけし、日を加くるを例として  
別荘と云ふは、偉きことか、六邊一と聞か寝  
具を入る事と云ふ、何れか七一室で并すと云ふ  
夏節のものもある。四角のうらいつまの、  
難と免かん、激しい風が来ると家が揺くの  
で、今更なる事あり、難事と云ふことか、  
と、今更なる事あり、難事と云ふことか、



かある時其家屋下が其の家前を御通るゝうつて地  
從の者になん誰んの家とおぼぬゝるゝと。地從者  
ハ東京の或る所の別荘と申上ると。屋下ハ  
悲しく是れ最も衰弱の別荘とあると。微笑  
を漏れんと。牧野静庵の語るをそのまゝに  
あるす

○内子ハ遺恨を新油して表紙に書を流すの  
いつか家用の流と書くのを我ハ流轉の流と書  
して其ハ流轉の流と書く。長崎の流轉の流  
ハ人のハ遺恨を流すの流と書く。流轉の流  
の二子ハ表紙に書かんとあると。流轉の流  
ハ遺恨の流の流と書く。流轉の流の二子を

流轉の流の二子を  
可とすと考へた。佛典にも流轉の流がある  
此の二子を流轉の流と書く。流轉の流の二子を  
流轉の流と書く。流轉の流の二子を流轉の流  
と書く。流轉の流の二子を流轉の流と書く。

○御田中蒲原科ハ小山田と稱す。一郷梅花を以つて名  
あり。戚家利良氏同郡の五島村に家す。余青年  
の頃利良の家族四五人誘はれて。目撃して一報す。  
五十年前に属し。今此郷の状を知らず。  
昔、往年目睹の事も甚だ懐懐なる。當時汽車  
の便も。徒歩數里を行く。所謂ハ小山田の郷  
丘陵起伏、人家點々、田村僻々、幽邃仙郷



の趣あり、極樹甚に密なり。花皆半瓣、所謂山  
梅なり。よの、清艶人を魅するよの、きも幽雅切  
つと境に、よの、若し都會化せざる極先を求め、蓋  
し此即ち就て賞するを歎、此即ち奥深き行けん  
人里を離れ、字渚山といふ所あり、ウヅを採るに  
往り入る、然んも動もせん、道をとく、身を以て人  
多く、ふらふらと、その村店の光澤、一音を待てる、此の奥  
山、容貌醜く、体格肥大、一色白く、長  
髪梳き、垂れ、胸を過ぐる、一婦人あり、山に入る  
よの、動もせん、ハ之れを、見んも、常つて語を交へ  
る、よの、所赤い其の指の何れに在るを、知るよの  
有、世の所山女と謂ふ、よの、或いんか、と云ふ、因



行のよの、よの、就て赤い説を為す、五多附の、日角能  
を以て江に、鳴鳴りたるよの、其其名と今記、隠隠を  
お大溪と、後後隠退、郷郷に、酒酒を好んで  
常、河河瀬の茶店に、飲飲む、行行交、恐恐る、茶茶店に、懸懸  
ひ、為為め、別別席を、設設けて、此此の肥大漢を、待待てる  
例と有り、其其婦、容容色あり、軀軀軀、大大、角角能の  
配、何何故か、婦婦、失失蹤、其其の所、在在を  
辨、七七、深深山の山女、或或、失失蹤の婦、在在る、きき、ここ、ええ  
やと、斯斯、僻僻境、在在、往往、斯斯、倚倚、况况、をを、多多、くく、当当時、少少  
く、所所、今今、尚尚、はは、自自、身身、在在、在在、碎碎、後後、内内、人人、之之、所所、質質、すす、此此  
事、をを、以以、てて、すす、内内、人人、のの、説説、くく、所所、七七、路路、之之、因因、じじ、多多、少少、のの、閑閑、色色  
を、加加、へへ、心心、講講、談談、俚俚、俗俗、出出、都都、るる、をを、採採、用用、せせ、るる、んん、とと、うう











かある。然るに甲士登山の際高めの烈風も甚  
く之を頂中を幸<sup>す</sup>了<sup>す</sup>ことか出来ず七合目の岩窟  
に一夜を美く宿る事あり。此の事曲に既  
す酒も日親しむことより其の委曲に既  
刊の余の随筆にぬめり中士登山の記あるから  
再説しういか。同じ所に泊り合ひて薩摩人の  
海軍士及二人が冷かに命じて合料とせし二升の  
焼酎を晝食糧から取り寄せし。士官の  
為に任せし焼酎を刺して熱酒を五合計りて飲  
んだ。その次の中士は今のやうな便利は無つたが志を  
晝食糧から焼酎とせし酒はあつたのである。自  
ら元来焼酎を好まず。且つ焼酎を焼くこと飲

藤原

出ることが多しある。この内、酔を恐るゝ初め、恐  
るゝ飲んたが山中の溪谷の非常に低いのでいく  
飲んたが一向に酔を恐るゝ事あり。更なる酒は  
酒の酔を恐るゝ事あり。此の事曲に既  
か無いと思ふ。若しこの地が無つたらん  
と解ふ。此のことかと其時況と思ひをた。又  
い寒地は酒を飲んたが平氣なるよかある。寒  
中乗合馬車に信州の追分をこつ時ブラン  
デーを一本囃り飲ぶ。志きり、煽つて僅かの  
平けに北時力寒の酔を恐るゝ事あり。此  
の経験からすると高山に酒を振るゝ事あり。無  
駄と云ふことあり。鬼とすると山中の酒を飲んた酒は







あゝ、常々、同作を禁し得る。七月廿七、評後録  
〇、閑、乗、ト、早、給、田、大、子、に、功、勞、あ、く、し、故、人、を、憶、お  
一、心、痛、を、考、い、て、見、や、う、と、思、ふ、此、今、思、い、付、い、れ、随  
筆、早、稻、田、に、北、一、心、痛、を、要、す、ま、か、ら、ん、  
故、人、と、う、り、て、〇、祝、魂、殿、に、記、え、て、お、も、ろ、く、死、多、の、人、の、中

# 世界人の横顔 [16]

## 将棋に孤を慰める

### 野口英世君の姿

北島 多一 博士語る



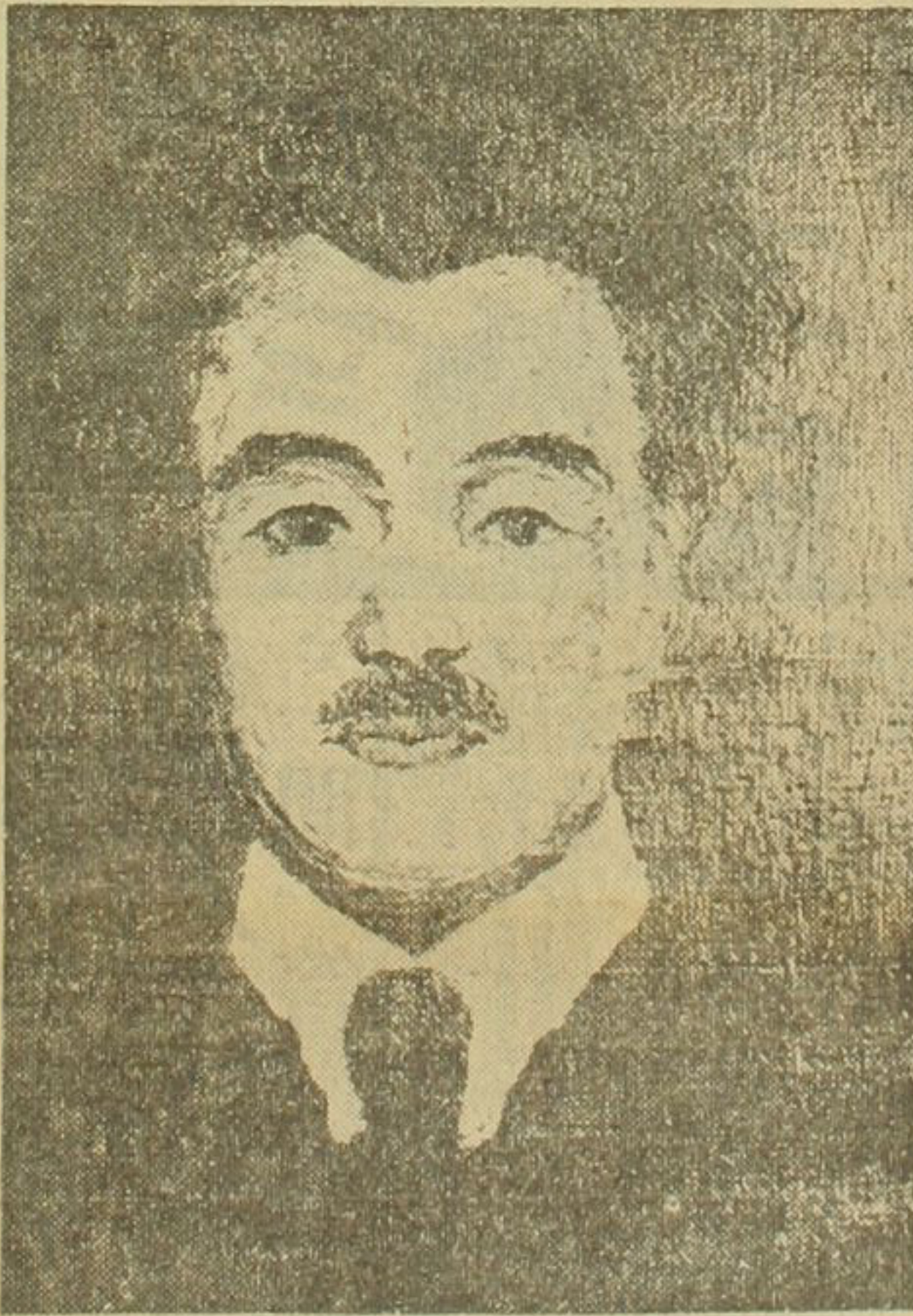
野口君が北里研究所に在る時、私は遠く海を隔て、ドイツに留學してゐた。私がドイツから歸つてくると、その前に野口君は太平洋を渡つて、アメリカに行つてしまつた。海といふ奴が、野口君の對面を邪魔してゐたが、その時、私は大馬鹿のハブの研究に没頭し、野口君はアメリカで、彼が最初の名譽を博した毒蛇の研究に没頭してゐたので、蛇といふ動物な節介者が、二人の間を隔つて、標本の交換やら、文通やらは絶えずしてゐた。二十年前、私は再びヨーロッパを巡つて、歸途アメリカに立ち寄つた。彼がニューヨークの公園に居ると、色の白い、ちよびひげの長い、小柄な、そしてネクタイを襟の上にひんまげた儀者らしき如何にも學者らしく見える男が、「ああ、北島君」といつて出迎へてくれた。それが最初に見る野口英世博士だつた。その時の私のニューヨーク

滞在は、僅五日間に過ぎなかつたが、五日のうち三日間は、野口君から「あれも見る、これも見る」で、研究所で暮らしてしまつた。短い旅行のことではあつたし、野口君の「な、ブロードウェイ見物で、おんびりやうたいと思つてゐたのに、野口君はそんな旅行者の軽い氣持など、ちつとも察してはくれなかつた。話はほとんど研究のことばかり。見せられるものは、試験管と、顕微鏡と、細菌と、書物と、兎と、そしてモルモット、少々有難迷惑にも思つたが、この學者らしい氣持が、この研究を生命とする彼の最大の御馳走だつたのだらう。

その後も、野口君との交遊は永くついで、彼が晴れの露朝をした時はもちろん、再び私がアメリカに出かけた時にも、彼ははつぱり會つてゐる。二度目にロツクフェリー研究所を訪れた時には、

「おれ、横にトラホームを植ゑると、こんなに血脈につくぜ」とキヤツ／＼いふ彼の眼玉をむいて見せたりした。たしか左の手だつたらう。

「子供の頃の火傷」  
のあとが、痛々しく、試験管を持つにも不自由のやうだつた。水のみ百姓の家に生れて、女園若、苦學、渡航、彼が理けるヒデオノグチの名を聲に響けるまで、そして彼が研究の機軸となつて、アメリカの最先で、痛々しくも、病に倒れるまで、彼の一生をひもとけば、それはまさに一片の生き立志傳だ。だが、研究室に、ちつと、それが必ずしも野口君の全面はうではない。多様な、情熱的



野口氏の自畫像  
— 1926年シヤンデーケン山荘にて描く —

夫二人の間にどんなローマンスがあつたか、それは私の知る所ではないが、結婚してからの、家庭の人としての野口君は、決して幸福のやうではなかつた。私は野口君の口から

「おれんところへこい、女房に引き合せるから……」  
「ああ、一寸待つた」とさし直す。二戰だと人なつさしにせが

な、天啓的な、そしてある時は無茶といへばいへるほどの野口君、その姿こそ彼の半面であつた。旅費を使ひ込んで  
「なるに、あつちへゆけば何とかなるだらう」  
と成算なしで無謀に渡米したほどの野口君だから、アメリカでも人生の苦勞はなめた。金持美人の

「彼の家庭の冷た」  
さが、いつも彼を研究所へ追ひやつたのだ、といはれる。研究所は彼の眞實な職場だが、研究に疲れると、彼はよく日本人クラブに入

「さびしい弱い心」  
を、だれか笑へようか。野口君は、研究に便利な、過激な位置にあれば日本へ歸りたいともひそかに思つてゐたらしかつた。

野口君、かくれない世界の學者の中、この







あつた。早稲田大子、天下の第一人者を創立者として又依  
と仰いたことを光榮とす。決して依命の元  
勲を仰ぐべし。最も過任として許さるゝ人のあつ  
た。侯の輩内カハ多くの者も湊合し、つよ  
りも遠かぬ偉大であつた。侯に敢て早稲田大子の  
講布を、早稲田の對もあつた。無いけれども  
其の新少紙を、通しての口々の講説、月見群の  
内外の訪定と語らん。意見ハ、外交経済社  
全教育各般の事、と満つて、毎日の都鄙  
の新少紙、例として侯の説法を、武殿が埋め

あつた。早稲田大子、天下の第一人者を創立者として又依  
と仰いたことを光榮とす。決して依命の元  
勲を仰ぐべし。最も過任として許さるゝ人のあつ  
た。侯の輩内カハ多くの者も湊合し、つよ  
りも遠かぬ偉大であつた。侯に敢て早稲田大子の  
講布を、早稲田の對もあつた。無いけれども  
其の新少紙を、通しての口々の講説、月見群の  
内外の訪定と語らん。意見ハ、外交経済社  
全教育各般の事、と満つて、毎日の都鄙  
の新少紙、例として侯の説法を、武殿が埋め



のを例とし。一日侯の使状を缺いたも、世間の寐寤を  
も受へたことか事少くある。侯の國民全体を尋  
徒として日又講演し、これより評言ひする。侯  
の事實大なる教育家であつた。早稲田大の  
生徒は分論教職を以てまゝに新多紙を画し  
て、将又種々の刊行物を依つて量内を受け、  
ことの大方を、何人と云ふ決して否か、ことが  
未ぬ、侯の講説は自から體驗し、此實際に出  
て多く、國家の休戚を關してある。侯の言説は  
權威がある。大衆の信をとり、どこも之れと比肩  
すべし、人があつたらうか。  
侯の議令開設、就て最も有力なる奏請者である。

侯の議令開設

最も早く、英國流の政黨政治を主張し、人々ある  
憲政の神は何れも云ふ、早稲田も亦うと云ふ  
も証言する。侯は憲政の考へ、長く強大なる薩  
長戦と戦つて、嘗て屈することなく、其の憲政  
教育の本場、早稲田であるといふ、其の私言は  
る。侯の確信を、其の早大の偉大の影印を  
及ぼしてある。中にも、憲政教育の其の基の  
最も大なるものがある。藩閥政治の一時を、  
を用いて、謀叛人の智識所として、之れを忘るべ  
き。立憲思想と百五十年の許さん、藩閥政治家  
から見れば、謀叛とも見くろむかも知れない。侯  
の、八十年の公道の道を歩み、をり、天下に信する











無論氏一個の私見である大隈侯の旨を  
承け、創立する此の教授も協議して之の及  
んたのである。再創立後五十年、垂人とす。今日  
校友が其の校に就てふ時、必ず其の獨主を  
高唱し小野君の口吻も、勤小野君如何に小野  
君の宣佈が深刻に記録せんかを証するところ  
也。

小野君が母校に偉勳ある所以、創立の際大隈  
侯、親炙して重要の事、冬畫し此の事ある  
るの勿論だが、是れも空より新進の若者十  
数名を候に紹介し教授として之を世話め此の  
にあるであらう。小野君、中大の學問の

大隈侯

早く外圓に留るの法律とて、其の傍ら政治の  
學を修め、或る學を授け、其の傍ら政治の  
中の高田氏や若くは文の事、其の傍ら政治の  
別缺をさぐる。其の傍ら政治の事、其の傍ら政治の  
議する。大隈侯、我等を率へて紹介し、其の  
交りから生じられた。開校の計畫も  
此のころより、教授として各科を受持つ  
ふつのも、皆小野君の侯と吾等の間に立つて  
幹起し、其の傍ら政治の事、其の傍ら政治の事、  
計畫して先立つる。教師のあり、教授のあり  
して、其の傍ら政治の事、其の傍ら政治の事、  
其と共に各科を受持つ新進の若者十名が

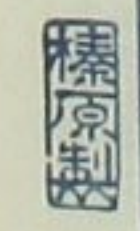






とて能く<sup>高橋</sup>守を重んじ、滿洲の心腹を實にからしめ、<sup>一七</sup>四年政変に大隈侯冠を掛く、や君も冠に殉じた。

君は開校後教務其他を其の推薦し、<sup>高橋</sup>友人に委して深く校務に共からしむるに、君の政進黨を率むるの激務にあつ、亦終始瘁し得ない若此の事世其にあつたからに、係し君の時又東登校して、日本政論、國策論、民法之學等、<sup>高橋</sup>講し、何れも君の著述中、<sup>高橋</sup>或る部分に傾聴の便があつた。君の登校して、稀んであつたが、吾等ハ君の橋場の<sup>高橋</sup>長と<sup>高橋</sup>訪め、君の政論を聴き、改正を望む際、其の推薦するも其れ。



但し君の家を分るること、開校前から、其今の鷗濱舎と主ふれ、川流いふれ名だが、實に政治を談するに、此舎が政談後設の試演もやつた。此舎に列つたのが、後より打揃ふて、新校の教壇とすりたのがある。其面より、高田、山田(一平)、<sup>高橋</sup>三山(重吉)、砂川(唯波)、天野(為之)、余と小川(為次)らむが外にも二三名のやうだが、記憶し難い。此の連中、皆帝大の同期生であつたが、小川大ハ全く別な畑の人の、獨り原考も後、里川真、賴崎士、岡をを、<sup>高橋</sup>代、倭文(生)清があつた。小野君が統計院に奉職し、此頃小川も日院に奉仕し、<sup>高橋</sup>君とお復し、關係から吾等を君と紹介し、<sup>高橋</sup>のあつた。尙且、開校の時關係し、







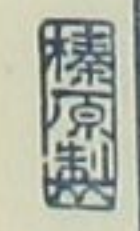








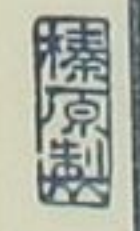
てあの如く、教務の常任若松の、青年やアウセント  
を正すこと、假藉かきく、採點も峻厳であつた  
と、親しく教を授けられた校友の語つてゐる。正米利加  
社の英學部から来たあつた。早稲田中では  
創立せよと、君の轉して、校長とて、教師  
と並ぶんば、實り君の為、得たと思ふ  
が、幾年かの後、君の事、山事。学校長に  
なり、早稲田を離れんば、のび、中、日、の創立、  
く、信を、界に、構へ、模範中、と、認め、ら、  
つた。君の、考、望、も、因、り、の、ある。或、年、か、の、後  
君の、仙、臺、の、 学校の、校長、の、  
なり、この、君の、地位、を、一、歩、高、め、ん、の、か、あ、つ、た、



とも、早稲田を去らんば、この、遺、憾、が、あ、つ、た。吾、等、の  
更、々、遺、憾、と、する、の、は、其、後、永、久、早、稲、田、を、去、る、  
大事、の、起、つ、た、こ、と、に、あ、る。君、の、大、隈、家、と、絶、縁  
さ、る、事、に、あ、つ、た。其、間、の、消息、の、長、く、  
要、ら、く、亦、語、ら、ん、事、に、あ、つ、た。其、間、の、消息、の、長、く、  
か、此、の、不幸、に、遭、(君、さん、に、こ、と、を、思、ひ、出、す、毎、日、  
吾、等、い、つ、か、新、勝、の、思、ひ、か、あ、る。君、の、晩、年、  
封、地、本、林、に、送、り、て、閑、居、せ、ん、れ、が、切、り、早、大、  
理、工、科、の、教、授、の、位、に、置、か、れ、前、に、筆、を、あ、げ、  
た。君、の、病、志、の、漸、や、く、遠、く、の、か、あ、る、の、に、君、を、  
之、れ、を、見、せ、し、め、ら、う、と、こ、と、に、あ、つ、た。其、間、の、  
ある。いつ、か、や、校、用、に、自、分、が、森、田、君、に、出、張、し、



し、何事も差し揚ぎ、施設に行者を却すと、直ち  
は君の傍にを泊ふれ、ことを懐ひ起す、君の長  
町を見れば、静閑のやうなありつた。完ち相當に、  
君の長に、ふさわしいものありつたが、安んじ、僅かの  
婢僕のみ、いさへかゝる、多心、寂寞を極め、おれ、  
かして、一室の、  
自分、  
挨拶をす、  
一突、  
の、  
施設、  
命、



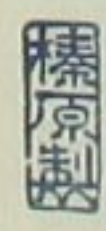
大隈英彦氏の後を承け、校長の後、男爵と  
ん、  
元祖、  
功、  
か、  
在、  
つ、  
の、  
皆、  
の、  
に、







不利を生ずることが必然であるのか、何れも手控い  
た。こゝが考へる大隈侯、自家の内政日々す  
窮乏を先けえん位であるから、毎月二三  
百の補給の事であるやうだが、事案  
餘裕が乏しく、昨日月末に交付さるべき補給が月  
も概へり或、数ヶ月補給を停つやうな事  
あつたか、学校の月給の拂を延ばすやうな事  
か屢々あつてひどく困んど。事案斯く場合に自主  
の考が起るのみ、自然の勢ひ、自由民生が起る人  
の補給をあるまじくして任滿を取らんことを斯の  
難儀も起るのみである。学校の大隈侯の創主は係  
こゝへ云へ、いつまでも其の補給を仰ぐべきである



しと侯の困難とどうして補給の續行を期するを  
どう思ふに對する道である。一、早く大隈補給  
を辭し、学校の自然自足を図らんや否やま  
は、既に学校の獨立を宣言してあるから、この校  
がけ係上獨立しようといふ、争ひが此の間の獨立  
を得ようとする。然るに何んによつて補給を辭す  
る丈の資を得ようか、方法、簡便に月謝の額を二  
倍するが、その金が満んかといふ、何んか、或らあ  
るか、信額の月謝を取ること、難事、業である。此  
當時、月謝は一円と相場が極つたのである。それを倍  
額する、就その學生に對し、信額だけのことを  
してやらぬが、実行が六、七といふ、或のやうに苦







の任滿の獨坐を此等の車中いかに考へたかを  
々々於ても懸念念が無いものなりといふ實に皆  
内心反省の決心を以てしよれば校長のその意思  
を云々く地位を長えんべから内實甚だせんじ  
と想像するが、大隈侯の前も提議を  
田君が説明した時より、校長の決意は  
も亦異常に無さうと云ふてある(通)といふ  
一、本條侯の時は大隈侯の周囲のいもの  
鮮明に、其の案の運命も知るさうといふ  
ある。前嶋君は長く校長の席を長えんべ  
の去るの後も常々その校の世話をせられたる  
校の第一回の基金募集の時より君を委員

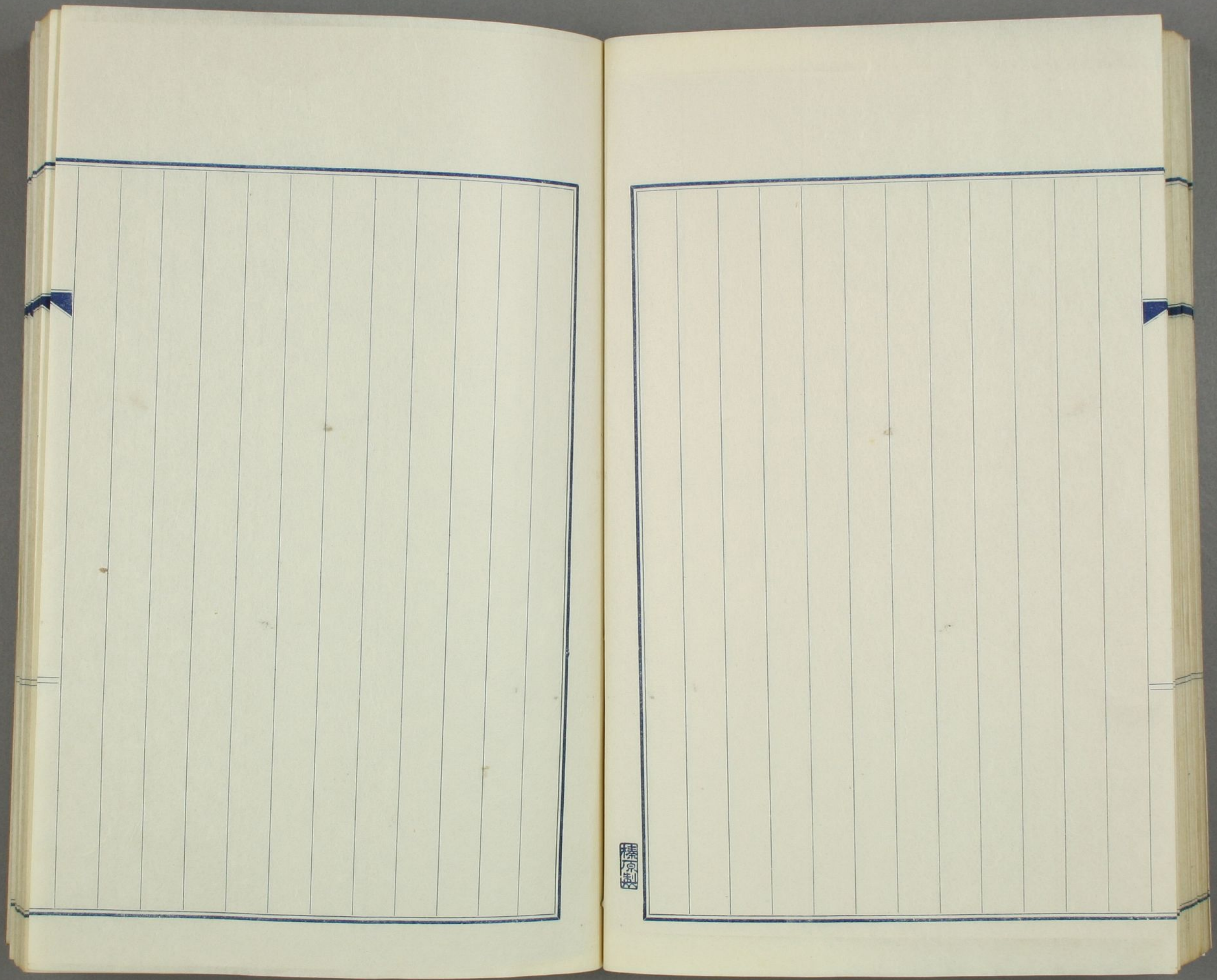


長と云ふ。君は自ら陸頭と云ふつて、  
お説きん時より、自合の随伴した。その校の因  
難時代は平沢専務も二千圓程の借金  
があつて、まんかある累をうけたのを除かんと  
君の意思を、中野武主年四口元々のあ文を  
帯回して平沢と借金の一半も寄附  
させられたこと(逆)君の好意がある。早稲  
田が種々の會社を經營し、其の都方必と  
君の世話をせよ、日清生命保険會社といふ  
創設の役員も社長の職に任じられた。日清  
印刷會社の創業時代より金融又一新して君の  
援助を得たこともあり、君は終始の校に厚意



を寄せてん比。自分書生時代早く君の眷顧を受け  
たの心印の先此事として最も親しく深く、君の長折  
とさ、や君の傳は自ら執筆を擔當し比、そん  
ハ「鴻爪痕」は君の往歴送事ハ略々そん、そん  
とあるから、茲に口説しむ。





清和堂



以下  
3 丁  
白紙







あるは、心格おの面倒もろく、鳩山君を迎へるこ  
とをさういふ。君は帝大法科出身で、古くはカシノダールに  
三浦和夫とあるが、此人が首席で卒業してゐるが  
大いであつた。後、侯爵とさういふ村壽大から氏重  
や高森修一から氏重といふ等々君の次席があつたの  
だ。早稲田の校長とて迎へるゝ人決して不足が無  
かつた。但し、但し吾々の氣遣つたの、前よりさういふ  
こと、新方針を携へて来り、まゝが建齋く、来ら  
ぬいせぬのかとさういふ點、左つたが、まゝいふ、然し  
過慮があつた。君は極めて、院議の人を干渉を好  
まらぬ、ハ寧ろ好まらぬ。當時学校の制度は  
校長の下に、此の院議があつて、高田君が其の椅子

徳島

に坐し、お事定、校長とて執るべき、事務、まゝ  
かほいたの、である。校長の時、重要な協議、  
其の、卒業式、臨んだ、式、卒業の式を  
行ふことが校長の務であつた。当時大隈侯さま  
は、侯さまとして起る、その時であつたから、君が内外、  
その威光、その、年、侯さまの業務を執  
つて、日、繁栄、あり、輩、派、も、関係、あつたから、  
日、の、校務、を、つ、この、不可、能、があつた。君は、何  
も、その、地位、を、つ、前、校長、前、島、君、も、其、強  
り、矢張り、無、干、渉、主義、で、言、い、な、れ、た。此、の、校、の  
諸、君、も、概、つ、て、こ、こ、ま、ま、未、だ、の、か、ら、前、途、も、君、の  
の方、に、従、つ、て、発、展、を、望、む、の、外、に、無、い、と、君、の



君等と云ふを言ひてん計りかき、その後の大  
改革の案も提議し、此時も君の校長として曰  
一の事と言ふの大隈侯の賛成を促さん。此  
鳩山君の辭也。曰と言ひてん計りかき、その  
事之美の前後と曰ふ態度のあつた。鳩山君  
が大隈侯から辭退せん内情は、高田其他の皆  
る年が荒いから、氣鋭の君の違つて起さ  
るゝと限らぬ。鳩山の彼等の先輩は、抑へ  
其上に置くべき案があること、誰んの提議  
言ひて鳩山  
君が同選せんは其の事、今りもあつたか斯  
る噂の事案はあつたかと思はるゝ、或は前島君  
が改選は無干渉主義であつたか、**個校の事**

櫻井

か起つたのかと云ふは、後年の大隈侯の襟度性格  
から判せしむ。侯も干渉主義であつたから、或  
は大隈侯は阿諛するもの、何人か、**其の事**  
凡を見てもあつたか、を言ふは、**其の事**  
く、裏面の事柄はあつたか、**其の事**  
といふは、君が提議する案を任して、**其の事**  
んは、**其の事**のやり方であつたか、**其の事**  
学校の事柄が君にあらぬこと、**其の事**  
るゝ、自分も、君の校長時代に、**其の事**  
るゝ、**其の事**の提議が多かつた、**其の事**  
監するもの、**其の事**の提議は、**其の事**

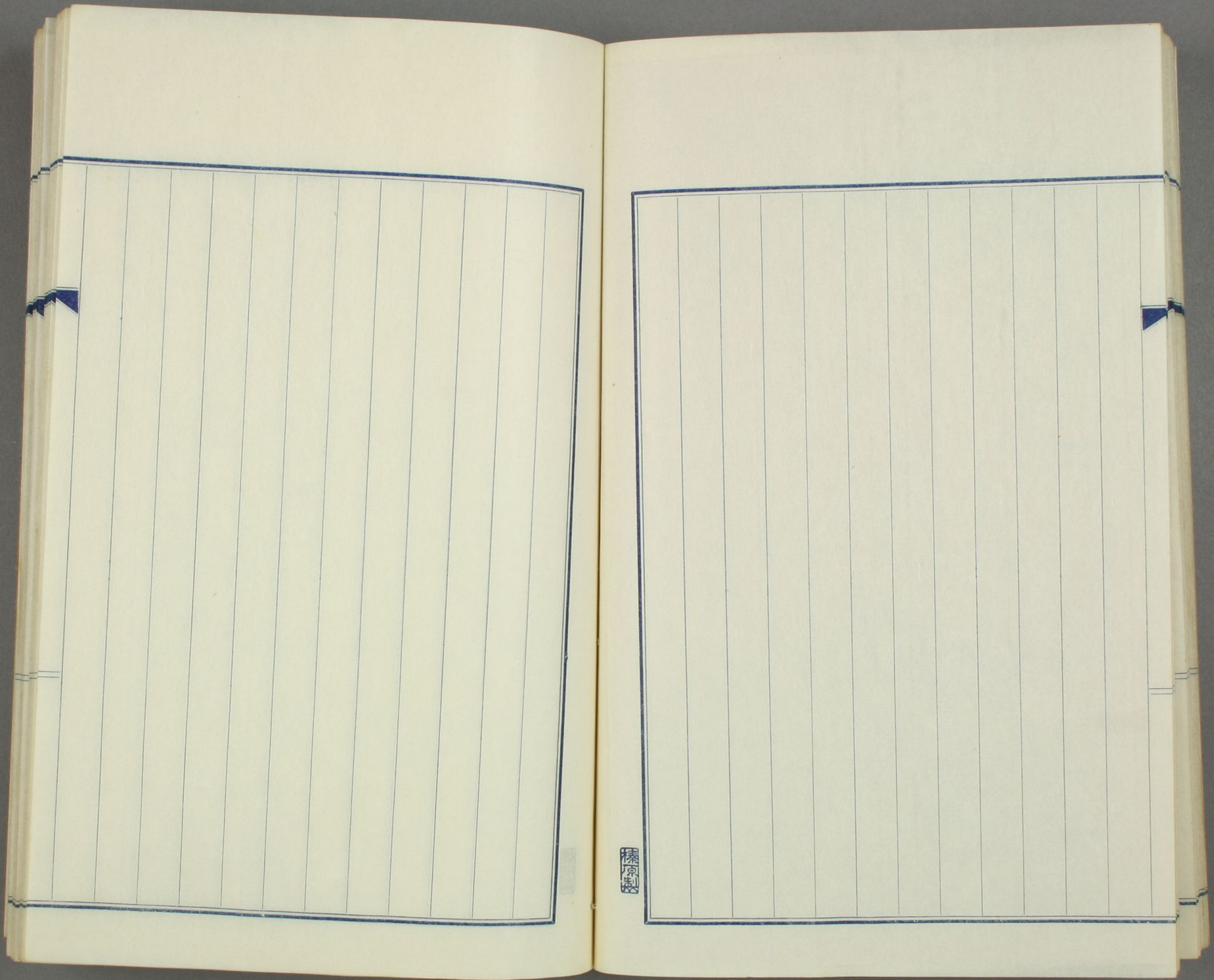


去の重責を全融を圓つれこととて再々あり  
此方面丈七七君と官ふ所ハ少くもあらた。君の生  
涯ニ就テ氣の毒ニ感ずることハ政局ニ志を得無つ  
たことである。君の口次田宗次郎の村氏ハ度々外  
相とありて、終ニ侯爵の榮をも得た。君ハ終ニ  
四務大臣として臺閣ニ主が終つた。君ハ常に衆議  
院ニ主席を有し、議長に昇げられたことである。任官してお  
りの地位ニ立つたことである。是も物々君を以て  
せしめられた一つに當り、又其の地位ニ立つた大隈侯  
の部下ニ属し、此の不利ハあつた。又其の君の  
恬淡の性ハ七十年侯にやうと思はる。君ハ幕大で  
主席を占めよう、海外留學生を引渡す時

標原製

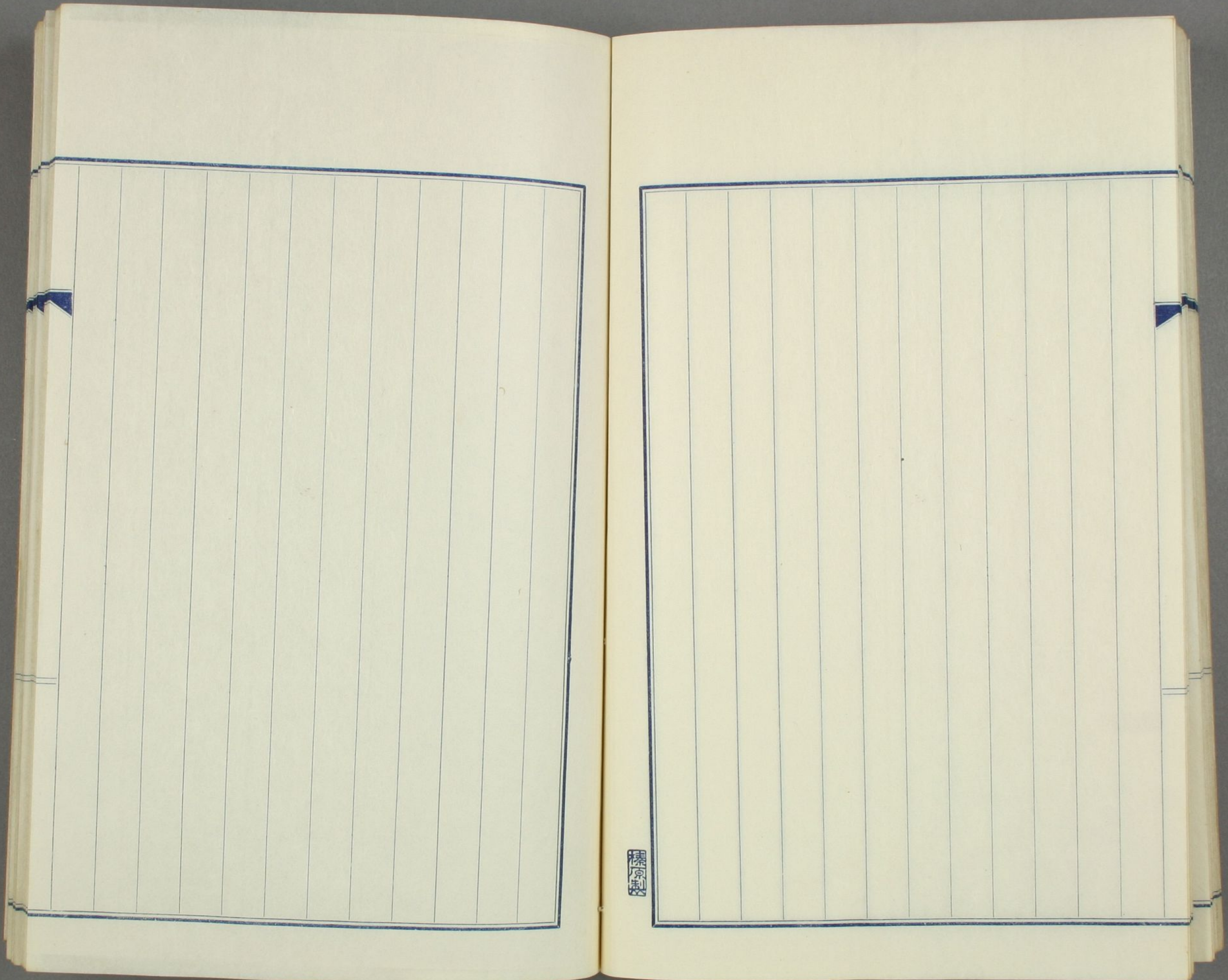
君ハ却つて黨ニ属し、此の君ハ例の政治家の調子  
ハ何故かと物々同し、ことである。君自らが云ふに  
ことであるが、君ハ政治家として、餘りな善良ニ  
過ぎた親がある、言ひ換へれば、辣味を欠いた。此  
鹿を逸する原因とす。此やうな思ふ、晩年君  
ハ焦つて大隈侯を棄て、政友會に投じた。其  
の是派ハ且く々々、急死に携も、自身の手段と考  
へた。此の事、此の事、此の事、此の事、此の事、  
此の事、此の事、此の事、此の事、此の事、此の事、  
つと、校長に荷重する、亦大隈侯に依つて絶縁  
とす。此の事、此の事、此の事、此の事、此の事、





東  
山  
堂





標  
記



○早稲田の開校以来二十二年、無人とする間、各科の教師  
として来り人の定むる少く、通算して二千八百人、友  
びてあらう。近年、早稲田限り、講座を受持つ故  
師が追々出来れば、或る時代、講習校並任の人  
が多かつた。或る一時、教員を缺き、学生補充の爲め、  
来り人もあり、或る課外の演習を受持つ人もあり。  
教師の去来、頻りに、走馬燈の如き、よかあり、  
併し大抵、世に名譽の左の比る者、一校の早稲田に  
足を入る。自今をい、其の十が、一を知りて居る。  
近來の多數の教授、別して交り、薄い、教授、  
主眼の教授も、唯以て交りて其の人と面識あり  
るれば、書くべきに相成る。唯れ美人の教

漢文

つてこそ、其の學識、性癖、を知らぬものがあるが、  
その人、教員として、就て、多く、外に、あるが、  
その人、既、先、い、故人、と、知り、たり、し、よ、か、多、い  
から、今、早稲田校後二十年、（昭和二十年）来り、  
を、書、く、す、く、容、易、い、多、い、今、左、の、故、人、と、  
就て、論、次、ら、う、思、い、出、る、事、を、書、き、つ、く、  
知つて、ある、こと、も、あ、る、（一）から、受、へ、れ、  
根本通の、（二）秋田出身の儒者、  
と云い、（三）文科、  
とい、法、政、友、で、  
ある者流の、  
内を、  
木刀を、  
藤、



法相友異彩の人が此丸儒であつた。此人身其也  
し此疵の人が無つたが、其の風采は憚つて、誰人も  
此のいふ淡敵とあつたか、さうして、自分ハはさう  
播伴を擔任して、さうして面白く話柄を有つて、  
人であつた。自分此人と交る前、嘗て東京市人  
議事であつた。今この舞の芳野世経の交り、  
教回石川の長に訪ふたこともあり、統製は必し  
一も頑固者流に多のと感得してゐるから、根本  
と對しても面倒は無つた。ある人の話して、  
真頼居士と懇意に、其の病目とさうと必し訪  
問し、此の黒川の惣情をもさうするの、  
お此の春籠書を見人が為めもあつたと

櫻川

云ふ、此のさうして、陽に置ける、  
信夫怒斬の、  
靴の講釋の、  
人がある、  
并才があるから、  
つと。いつ七酒氣を、  
ひも、  
登り、  
暢び、  
し、  
清長愈の、  
んを、



も六張り得るの文章軌範を講し、其の曉  
者からやくと、怒軒先生酒氣を帯ふこと希  
大の時と曰く、いかに既に老いて光彩ある彼の  
ハセテ文章の妙は後破るありと云ふて所談するを  
常とし、おて一時間の半はは餘後④又費し、一時  
間一日の報酬は、折講に出来ぬと氣缺を吐き或  
ハ當時噂さる破鏡のさあしさを語り舌しき  
ハ當時文章ありし樋口一葉女史を後身の迎へ  
ルハいづと、曉而もるるその生に告ぐ日所先生の面  
目躍然たり、併し特に漢文に志ありよ、其の文章  
の介心を清ふと、家に持ち帰りへ、あまの鄭寧  
と未を入んぬと云ふ

夏目漱石ハ一時教鞭を執つたことあり、多んいま  
いふ命大在る中があらは、氏の家の下宿業を志  
み、氏の二子費を貰ふが、境遇があらはと云  
ふから、多分豫も、其の教鞭口の為め、未だ  
てある。其頃の④中、文科の學生も、さうさう  
表地の悪いよ、かある、質問攻め、教師を困  
らせることが往々あり、其の弱の教師、解き  
して辭職をし、人すらあらは、夏目ハ質問  
攻め、退つても一向平氣が、少くも困らさう、  
又さう即ち、夫を、ことを避け、次回の講席  
より、其の質問の卷が、宛から河を決すること、  
奔放止まる所を知らさう、概かあらは、質問者の曉を



奪ふことが常であつたと云ふ、執事龍時代の片鱗と  
又口を得べき歎

外田人の文科を教へた人は米田人でスタンリーであつたとい  
ふ。後、ラフカデス、ハルン、スタンリーは学  
生をセントルメン呼ぶやうに種々の場合に入米  
利加の獨主を説き、本校も獨主せざる可からずと  
説いた。ロイドは學生を小兒扱をしてボイスと  
呼んだの如く人氣は無いやうだが、学力が豊富で  
あつた。その徒も低頭せざるを得ざるやうな  
い。ラフカデス、ハルンは帝大に入つたのが、  
早稲田へ来り、早稲田の學風を喜んだ。あの人の  
性格は官僚の臭氣を厭ふやうな相違する。早

稲田の自由の風はハルンの如く、他のウチを  
祝賀したことか、少くもさういふのである。ハルンの来り投  
いたのハルンの誇りもあつた。語のつきまつくの事がある  
けん、小泉ハルンもあつた。若き者もあつた。邦  
人と後で居るから、唯一事を語る。大隈總長  
ハルンを喜ばし、面影を欲す。某教授、總長の心  
を傳ふ。ハルン、辭して云く、邦人禮、嫌はず。余はハ  
ルンのトロツクエートである。ハルンは蓋し總長  
を尊大の人と思ふ。彼は、彼は、彼は、彼は、  
終つて、彼は、彼は、彼は、彼は、  
く、ハルン、彼は、彼は、彼は、  
き、且つ、愉快を、感ずる。唯、唯、唯、唯、



外交の手腕を思ふ。老屋ハハルンセクリステアンとも  
一冊の一番、邪蘇多を云々ハハルン曰、甚く天して  
云く、余寧ろ祖先教を欲す、抑化して日本國  
藉に入る所也、流石の炭七ギヤフニ而かも是ハ  
益々真に入りの也

文科の創設、以て大切なる教師ハ大西祝氏があつた此  
人ハ玉山の後、東國から遠く聖心山の林兼、生ん、其の山  
の名を辨とて、樺山と云ふ也。初の同志社又その以後  
又帝大の教員業を卒つて早稲田の教鞭を取  
つた。植子が其の専攻也。市時文科の植子に  
する、あつた。其の科を擔任し、其の頭腦が明晰  
其の講義、其の進歩、其の緻し、其の教を多々人の話に

其の講義に入ると、其の講壇を離れて講義の周圍  
を歩くと、其の講演、其の素直、其の性癖、其  
つと云ふ、浦柳の竹貫が清癯の人であつたが、非帯の  
勤勉家、早稲田の外の他の各校、其の掛持、教鞭を  
取り、遠路の往復を常々徒歩にして、倦まらなかつた。  
坪内君主筆の早稲田文芸、其の執筆も、其の時  
坪内の主筆が遠くを催し、其時君が其の一行中  
に在つた。行先ハ品川附近があつたが、途中、其の空  
腹を訴へ、其の時、君ハ此して云ふ、其の  
人、其の舌を吐く、其の也、其の精神、其の緊張を缺く、其の  
と君一流の説を唱へ、其の空腹者、其の也、其の  
して、其のパンを購ひ、其の饑を醫し、其の其の者の一



人が語つた。君のその後、幾時論文を深めたか、君は、深切  
 に其の論文を精査し、其人の無つたと云ひてゐる。幾分  
 も見返して細かに評論を下し、たまに、吾生の中まに  
 思ひ切つて思論を冗長に百頁の書いて先生を煩  
 悩するやあつたけれども、是れに對しては、極く深か  
 敷へる所があつた。文神の初期より少くとも鬼才  
 を示し、此人の量、陶工依るのひある。何故か、晩年  
 に君の心、極く轉して京都大を又轉した。君の洋行し  
 たのも、京大から派遣されたのであつた。帰朝後、君は  
 神往表物に推つて、閉居して、段々、帰朝後、君は  
 當時圖書館をもち、し、自今を館へ訪入ると一時  
 間、禮儀を定へた。今、君を思ひ起す、其時自今、の

東京

出た、君を推しての群書に涉り、徹底的に研究  
 してゐる人が、外圓の行つて、何人の得る所があつたか  
 と、君の之れを答へて、生ける若者、親し笑して互  
 抱、其の講説を笑へたことが、何奇りの仕合であつた。  
 實に、若者の親炙し、うけ、い、書物、い、び、理解  
 して、進めること、か、あ、地、の、令、見、が、君、の、本、意、に、あ

此の節、君の答へ、如何に  
 と、令、得、する、所、か、あ、つ、た、か

最後



二。関根山直氏「源氏物語の講義」が受持にて  
八七呼心物語あり。関根氏「女子師範」も南時  
田に課目を受持つてゐる。氏自から「学生」出



園内り外  
入まつて  
命み務ま  
し

けて来るる女子も相手は此書を済ますこと、難い鬼  
角速、憲を要し、隠微に深々、所は推測に委す  
ること、か止正を得るべからず、男子も相手として、衣  
憲、及川、多のとあつて、際どい、変まむ、ウ、エ、ル、も、取  
り、あつて、説く、り、む、荒い、連中、の、血、を、流、か、し、た、吾、も、も  
帝大時代、又、星川、真、頼、翁、の、孫、氏、物、修、も、家、外、も  
の、講、義、を、聴、い、た、あ、の、此、の、講、義、ハ、節、禮、年、入、つ、た、あ  
の、微笑、が、ハ、湛、く、ず、微、を、穿、ち、細、を、折、き、究、か、ら  
實、境、を、究、む、村、に、し、て、語、る、や、う、な、致、が、あ、つ、た  
分、別、根、表、の、七、見、を、思、ひ、合、ふ、も、も、と、巧、め、さ、し、果  
然、想、像、を、し、る、知、る、も、う、閑、根、氏、の、比、較、へ、は、優、劣、果  
して、め、る、



学校の創立より、民法科を担任した人は、三宅常倫氏  
かあつた、帝大の出身、む、吾、も、も、一、年、先、輩、が、あ、つ、  
た、と思、ふ、が、雪、嶺、三、宅、惟、次、郎、氏、の、定、見、は、あ、つ、  
ま、く、教、員、の、無、つ、た、当、時、に、か、ら、吾、も、も、可、る、ま、交、つ  
た、か、し、た、こ、も、忘、れ、ら、れ、今、ハ、此、人、と、就、て、語、る、こ、と、を、も、た、ぬ、唯  
だ、語、る、へ、き、い、極、め、て、豪、傑、肌、の、人、に、些、事、な、ら、ば、着  
し、ま、い、と、云、ふ、肌、合、ひ、あ、つ、た、か、雪、嶺、氏、の、こ、と、キ、訥  
辯、い、い、無、つ、た、も、う、一、人、豪、傑、肌、の、人、を、思、ひ、出、す、  
ま、え、の、股、跡、時、中、氏、に、あ、る、此、人、ハ、司、法、省、の、法、律、学  
校、出、身、で、ア、ツ、ッ、ベ、シ、中、野、の、教、も、受、け、た、佛、法、の、者、に  
あ、つ、た、号、校、で、法、科、を、受、持、つ、た、か、記、憶、ハ、曖、昧  
だ、が、當、時、の、舎、監、に、あ、つ、た、こ、と、ハ、丈、ハ、確、か、で、あ、る、此、人、



















學校の詩経や在子をも受持つておれ、自分親  
しく交りの比が、ことごとく超然たる所であつて、面白  
い人物であつた。めづる事は、根本通の所が、序の巻  
として、易の鈔本の一半が、~~山~~氏の所である  
ことが、知れて、根本おの一方、~~山~~氏の所である  
~~山~~氏の一笑に付して、譲の所を見ても、ことごとく、~~山~~先  
と相拒絶のごとく、思ひ出す。  
山崎山重吉氏の、子役の創主に、其の一人は、漢科、砂  
川雄俊氏と共に、法科の教鞭を執つた。氏の著書と  
希大の因習であつたが、年々、四の程多く、学生  
時代から、老成で世故を通じておれ。当時、名判事  
と稱せられた玉乃世履が、希大の訴訟演習をやつ



此時より教員生の内特々玉乃の注意を惹き、氏  
を名指して、君ハ判事をやつたことがあると問はれ  
ことがある。曰、氏ハ判事であるが、其の言説ハ實際  
に老巧で、學生は不似合ひあるかと疑ふ目立つ  
たのである。○其ハ果して辯護士として名譽  
を馳せし。氏が早稲田の教鞭を取つてゐる間、  
起つた事件ハ、法目科移轉論で、氏ハ其の唱者  
也、大波瀾を捲き起した。○  
田の法科ハ、振はるゝ比が、神田の今の法各院  
大學の前身英吉利法律學校が創設さへ、  
富山氏セも、起人である。氏ハ此の學校の  
創立と共に、早稲田の法科と移して併すべし

東京

大波瀾

と主張した。實ハ當時の早稲田の紛糾する業務  
に當り、おる法律家、を招致するに餘り、片  
寄り過ぎて不便が甚しくつた。○富山氏の移轉論  
の主要の論議は、在るも、氏ハ早稲田の法科の不振  
を此の利を得てゐるに歸して、公平を考へて、氏  
の言ハ所ハ一理ハあつたが、併し折角創立した  
主要の法科と、單ハ此の利を得ざる故を以て  
他の學校に合すといふことハ、學校の一端を崩し  
て他の併存を委する觀がある。○校内に大波瀾  
を捲き起し、學校の輿論ハ移轉を不許として  
飽まひ死守することゝする。○當時の噂は、英  
吉利法律學校の背後より、山田歆義の如き、藩



成政事家が暗に操縦しとあり、早稲田の一角を奪  
ひ大隈侯の経略を滅せんとする苦肉の策と云い、  
当時薩長諸侯が早稲田の一角を奪視し、  
折柄から、大隈侯の陰謀の略があつたか  
知れぬ。大隈侯の死、早稲田の法科  
一と居えり。こゝに疑問あり、早稲田の法科  
の創設、此つに馬山氏が何故に斯く悪策と  
此一と早稲田を危ふしと云ふことある。氏の上  
叙の如き陰謀のあることを全然知らずかつたか  
ありうか、さういふ人も分らざるが、氏に決して薩長の  
走狗と云ふことなき人物なるべし。或は敵の略を知つて  
の裏を撥かんとし、此の如きありや。氏に早稲田の

漢京製

権略家であつた。いつか虎穴に入るといふ、席子と  
いふといふ大山をやる人であつた。改進黨の属した氏  
が、堂を脱し、衆議院に議席を有すると、中  
を標榜する。曖昧の大隈侯と投じ、此を以て  
いふ彼も其の心事を不審かつたが、氏の意は  
曖昧の議院を陶治し、さうを引率して改進黨  
の復讐をせんと策したことが知れた。設令いひ引  
率復讐が出来ないまゝ、改進黨の典章  
を作んことを庶幾したの心事である。個  
人略の馬山氏が往々試みられたことを、  
と、法科を移轉論、自ら法科を擔つて、新設  
の法科に投じ、終る。早稲田の

早稲田の











二人に對する其の落涙を禁ずし得る。

吾等の帝大田志に山田が二人あり、一は法科の山田喜一、  
助氏が一は政治科の山田一平氏あり。吾人共、長  
廣舌を弄するが、西山田と并べ稱し、此の吾人共、早  
稲田の開校の時、来り投じ、吾人、長廣舌を競  
ひ、その才藻をも競ふ。山田一平、  
業期、歸んば病み、卒業論文を書き、  
一平、  
と云ふ、何を書いたか、  
山田共漢詩を作つたが、  
上む、  
如、  
山田共漢詩を作つたが、  
上む、  
如、

漢文

既刊の逸業に、  
科を教へ、  
記臆する。一平、  
彼人の志、  
自んを、  
え、  
ん、  
長所、



稗の文才かあつたけんふ才に任せて連者を書くこと  
とか偶々粗慢な流んを律で冗長と笑した。三宅  
雪山（初）の才を律で評して天才の出来  
換るといふは、（き）其の才のあつたをみる。今チキ  
才を磨かぬば、（き）雪山が出来換るの評を免れたいあ  
らう。惜いことと中央の文壇に筆を揮ふ機分  
が、（き）地方のシヨルリストとさういふ文を修め  
概に素さかり、後ろの細口の為め毎の四五の地方  
新書に投稿するやうに成り、天下之記者の名に  
傳ふといふ、（き）評漫の筆、益々粗漫とさうい  
彼んが如き才人が一生不遇に終つたのは、柄不相宜の  
以治の志を抱き、市志と齟齬をすまふ身を

標原製

轉するの雅量と缺き、飽きを我まらぬ執着し、  
其世を破るは、（き）放ちあつた一筆を、吾等が  
さう不遇の境遇に見ても、（き）早稲の、後歸を  
初めれば、（き）一流を、（き）の雅量と  
遺憾とす、（き）を、（き）を、（き）を







するのハツライ事であった。一昨年のあつたか君を偲ぶ  
園日迎へ、史家先輩と共に君の夫を慰むる言  
を催したことがあつた。卓上君の淡々とした言  
語、前もて、政解し、並ぶれば、深し君は九十の壽を  
保ち、翌年、鏗として、氣力、尚ほ旺盛である。

吉田東伍、氏、早稲田の史学教授として誇りとする人び  
あつた、初め早稲田の教授としての、小川為治、氏の幹事  
時代の、圖書室事務主任と云ふ、軽い擔任から始  
まり、終つて史学の教授と云つて早稲田を終始した。  
氏と自分、種々の深い関係があるのを、後述(べき)こと、  
少くも、その既神の余の隨筆に大略を録し、  
から茲に、重説せぬ。久米博士の談に據る、吉田

東京

の初め、博士は、今更ら、日韓古史断の稿を撰  
へて、其、意見を質し、此の時、とあるから、氏、東京に  
上つて来て、自分の家、に、寄居、宿、宿、して、おられた。  
由、吉田、其、次、訥、辯、じ、何んか、と、云ふ、と、沈黙、の方、である。  
此、に、久米、博士、七、初、念、の時、に、賢、席、何ん、と、判、じ、  
と、云、い、ん、た。今、見、る、時、博士、に、或、る、材料、を、示、して、君、の  
論、據、に、缺、く、可、ら、ざる、よ、と、云、は、れ、と、注、意、を、入、れ、と、吉田、の、黙、  
つ、と、一、清、し、黙、然、と、取、り、上、り、取、り、上、り、と、云、  
つ、た、に、博士、の、内、心、不、快、な、感、じ、が、七、そ、古、史、断、が、刊、  
行、せ、ん、と、博士、の、比、を、見、ると、ま、ん、が、笑、み、を、し、博士、の  
サ、セ、ス、ト、と、文、献、が、来、り、其、儘、載、録、せ、ん、と、お、り、の  
を、見、て、容、易、と、云、は、る、序、記、に、ある、こと、を、感、じ、と、云、



ん比、吉田と久米博士の学問的交通が日、いんから始まるの  
で、博士の吉田を予りの畏敬せんと、吉田が歿するまで、  
い特々博士を煩く、<sup>長文</sup>長文を著述の撰文を請ふたのも、  
深い縁因があるからである。

小川為次郎氏、別項に録したところ、吾々をハ野村氏  
は紹介して人である。吾々が吉田在学中、本師の予  
所し進文を余といふが、ある、橋本郎と云ふ人の経  
に傳り、漢学の外に英学も教へた、その英学の教師  
ハ、當時の帝在<sup>大</sup>中の人を執人として、いんを充てたのであ  
る、<sup>不遺</sup>不遺取りまいる、吉田の仕事と、吉田氏始め、吉田山田  
らとの面々もいんを應じた、其次ハ川氏、此の塾舎  
の一室を借りて下宿の州に任してゐたので、自然吉

橋本

田氏といふ、交りか起り、ハ野村に紹介することゝな  
つたのである。此の進文の舎、今考へて見ると、早稲田  
の教授の事、教授振りを習習養食せしむる  
ハ、ハ舞臺であつた、吉田氏等が早稲田の教師は  
初めから、此のマゴウキ無く教へ得たので、此の準  
備的練習があつたからである。坪内氏の如きハ、塾舎  
の一室を借りて、こゝに起居し、縁故者から子弟を  
托せん、<sup>月</sup>月といふと、同族ハ、教育せよつたのであ  
る。此の塾主の子弟で、槐次郎、楠三郎の見方ハ、皆  
早稲田に入つて、吾等と同室の習也である、皆早く  
歿した。兎ニ角、早稲田に、早稲田の起る前、此の塾  
舎が、吾等等の倶楽部ともいふべき、教師を



勤めたるもあらず、勤めたるのよき時、おこし又出う  
けて、決然や討論するもやつた。吾等も、深い縁  
故のある所、故に話のすし、傍途に馳せしか、  
小川氏も終る、早稲田の早稲田の幹事、を司るこ  
とより、比、氏の幹事時代、客附金募集の事  
が漸やく、苗、主として、小川氏、援つて、案さ  
んが、実行に至らうつた。氏、事務、大々あ  
り、経験も、左、職務を、教、理、物、し、こと、  
少く、く、あ、氏の、本、欲、い、言、早、う、実、業、方、而、在  
つた、の、い、も、く、早、校、と、留、ま、り、去、つ、て、大、改、正、赴、き、  
あ、田、果、次、り、氏、の、後、を、得、て、あ、田、湖、の、銀、行、總、令、  
社、の、監、督、と、さ、う、つ、て、終、結、し、た、の、但、も、校、と、の、関、係、の、  
保、し、

横濱

連綿として、續き、社、川、雄、政、氏、と、共、に、校、友、を、統、率、し、  
て、校、の、重、鎮、と、あ、つ、た。

氏、小、田、原、氏、の、後、を、承、け、た、四、分、田、原、氏、の、柳、と、風、の、流、儀  
と、い、ふ、趣、を、異、し、一、つ、生、の、對、し、も、妥、協、的、の、い、う、く、  
宗、生、が、我、志、の、事、を、申、し、出、す、と、君、等、の、や、う  
と、柳、の、下、し、い、つ、七、籍、が、あ、る、や、う、の、思、ふ、の、に、向、違、て、  
存、と、さ、あ、瓜、と、治、硬、と、別、法、形、に、す、瓜、と、あ、つ、た、と、  
の、以、つ、宗、生、の、氣、分、を、荒、川、の、れ、か、ら、小、川、の、こ、と、も、  
硬、の、幹、事、と、先、容、め、が、あ、つ、た、の、也、  
有、賀、長、雄、氏、の、を、等、の、同、志、と、あ、つ、た、け、ん、も、  
八、長、い、間、連、絡、が、無、つ、た、氏、の、大、が、教、授、を、勤、め、る、  
志、十、字、社、の、関、係、し、な、う、若、者、に、忙、し、か、つ、た、う、一、つ、餘







とす時平衛門の末は高田を特ニ別室ニ延き後母  
死後の事と喩し比。多。後活中突如氣閉  
けり如く云く、高田君ニ托して置いとる也  
先きま死すぬ限もぬと、別室ニおれ自今を  
呼び入して同じ事を自も喩し比る也、  
然るに氏の面目ハ此を在つて存す。



早稲田の過ぐるに随分面白い人物がゐれば自由の学園  
の二校の教員も生徒も石塚茂也あつた。其の官軍  
権威から自然ぬることもあつた。其後田中氏も  
都府のあつた磯部四郎氏も初期の法科目を教

法科

（此が或る朝教務へ這入ると、學生に向ひ君等の  
内金を二回有つてゐる。このがあなたに貸して貰ふ  
たいと云ふたのが或る日の夕と兼してやると直  
ち又味へ出て、向も歸つて来た。多分車會  
代を拂つたのであつた。當時の車代も二回  
の月々も過さるの口善悪も多し。連中の先生  
所から馬を引いて来た。其の馬はかと思ふた。其  
あつた時先生の去席が聲いので學生は退席せん  
とする折柄、先生やつて来て、先生は宛いて云ふ  
ふ、其の實の昨夜花を引へて夜深しと。此の  
ツイの晩くちつて満ちると挨拶の後の受持

の治罪法をいひ、高橋に東めて、其方ある。其方の  
惚の氣流をいひ、其の生を燃と捲いた。  
其か、其の津波の氣流をいひ、其の生を燃と捲いた。  
其か、其の津波の氣流をいひ、其の生を燃と捲いた。  
其か、其の津波の氣流をいひ、其の生を燃と捲いた。







トシ

判沙汰と云ふことかある。 ~~東洋の事情は如何なる地~~  
~~の者、體軀肥大の人で、趣味的、詩的、地現を海~~  
~~たる特法がある、支子自身大の旅行家じ、多くは~~  
~~體験、**性**を指し、**性**を言ふ、豪傑肌と**性**~~  
~~義振とが相待つて、**性**の氣受がよかつた。~~

い誰の七割は壇に祀つておられ、あの人七割は校生  
身にあつた幹事をつとめたこともある。 ~~文学術肌は酒夜~~  
~~をまゝ、人の癖を真似、**性**を教ふるを賑~~  
~~いしたよであつた。~~

三宅学倫 和田恒徳ニ 股合時中  
此部へ編入

早稲田の先生は、秀才の内、島村派の方 ~~抱月~~ ~~かみ~~  
氏、哲子や文子を終めて、同窓者に早く其の才を  
認めた、氏、明晰の頭腦の持主、事を経書  
するに、位格の才があつた、文章、~~その人の性格~~  
○ 七天籟のめがあつた。君の文科、教鞭を執り



其後、**國威**を以て、**所**に感化し、**董**の事をも董陶すること  
深かつた。**既**に英、**四**の各一七、**怕**來自、**主**義を  
唱道し、**早**橋田の**自**國、**氏**の奔放を従ま  
まろしめられた。氏の子、**君**の先輩、**氏**の自  
主義、**異**論、**無**つた、**此**主義の、**六**大行、**異**  
論があつた。有休、**君**と、**君**の多くの長所を有し、**此**  
**六**短所も多かつた。**君**の、**理**を以て、**短**所を粉飾し  
之れを、**敵**人と、**此**が、**君**が成功せ、**終**に、**破**綻  
を現し、**此**の、**何**れ、**文**藝、**協**会、**二**投、**一**女  
優、**執**味を、**感**じ、**其**の行動が、**露**骨、**二**する、**つ**  
**此**こと、**君**が、**其**の一例、**二**ある。**當**時、**自**分、**此**事  
の、**君**の家庭、**二**累、**君**の、**二**こと、**君**の、**亦**、**此**

此の事

事、**君**の、**此**事、**君**の、**二**こと、**君**の、**一**、**二**  
度、**友**誼的の忠告を、**此**こと、**君**の、**其**忠告に  
對し、**君**の、**此**事、**君**の、**無**つた、**即**ち  
**君**の、**此**事、**君**の、**二**こと、**君**の、**一**、**二**  
し、**君**の、**此**事、**君**の、**二**こと、**君**の、**一**、**二**  
とする、**君**の、**此**事、**君**の、**二**こと、**君**の、**一**、**二**  
の、**君**の、**此**事、**君**の、**二**こと、**君**の、**一**、**二**  
を、**君**の、**此**事、**君**の、**二**こと、**君**の、**一**、**二**  
に、**君**の、**此**事、**君**の、**二**こと、**君**の、**一**、**二**  
故、**君**の、**此**事、**君**の、**二**こと、**君**の、**一**、**二**  
に、**君**の、**此**事、**君**の、**二**こと、**君**の、**一**、**二**

此の事



